

第2章

市民の健康を取り巻く現状

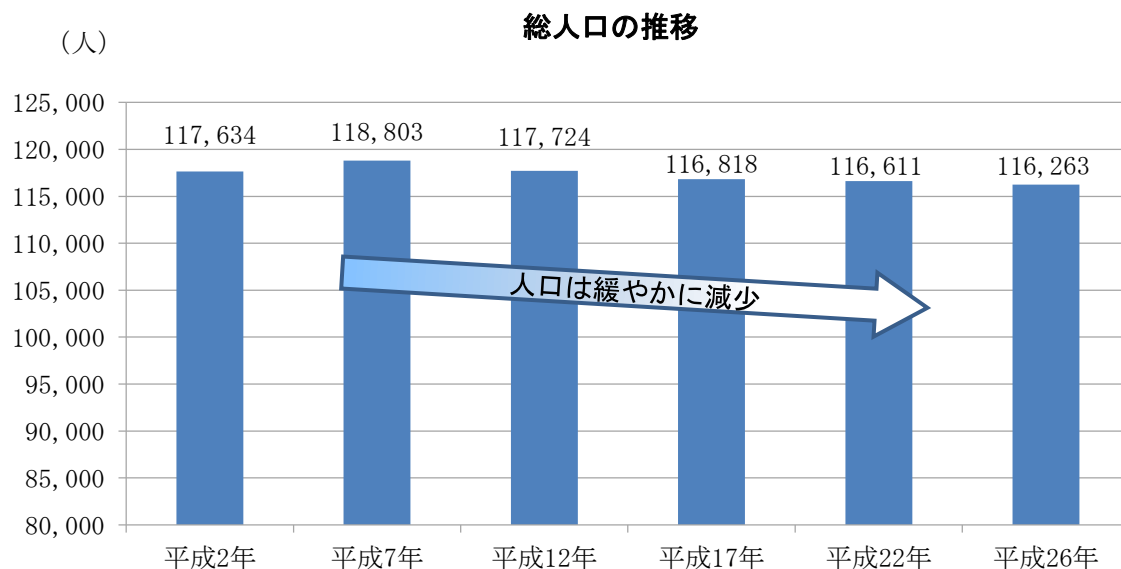
第2章 市民の健康を取り巻く現状

1 統計からみた市民の状況

(1) 人口の状況

①人口

本市の総人口は、平成2年以降大きな変化はありませんが、近年緩やかな減少傾向にあります。



資料：国勢調査、平成26年は市町年齢別推計人口（山口県）

②年齢3区分人口

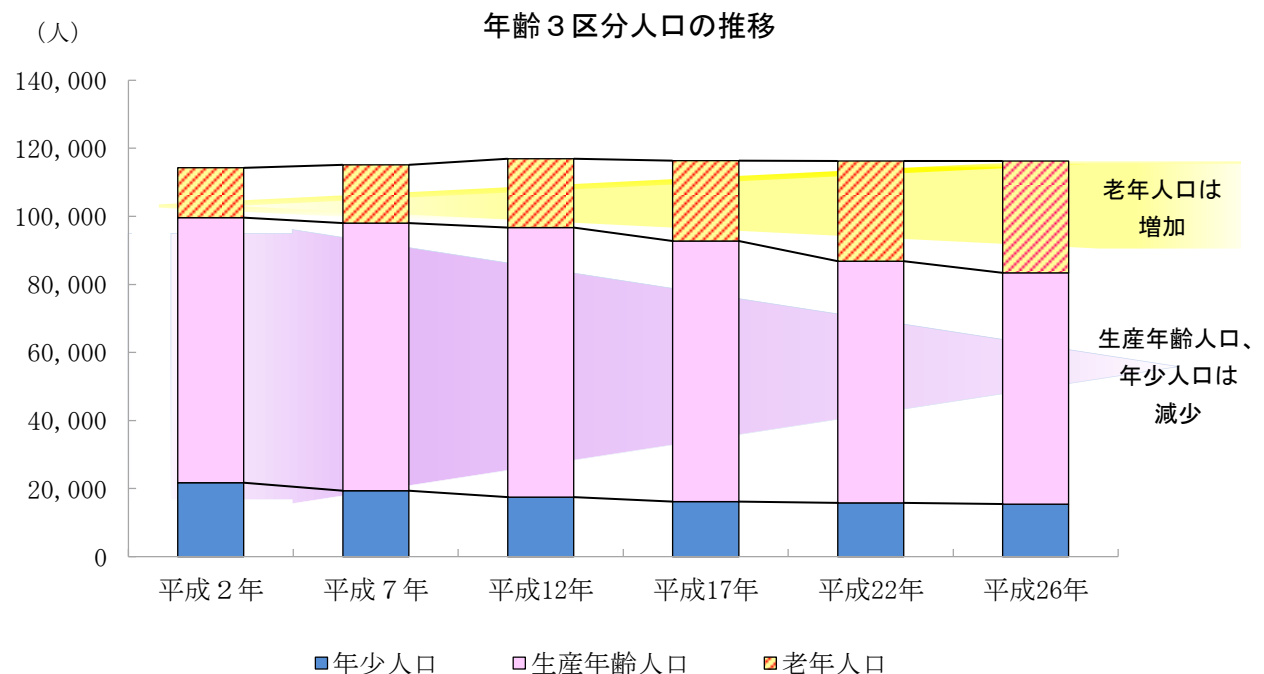
本市の年齢3区分人口は、平成2年から平成22年までの間で、年少人口（0～14歳）が5.0ポイント減少、生産年齢人口（15～64歳）が5.8ポイント減少しているのに対し、老年人口（65歳以上）は10.8ポイント増加しています。

平成26年においても、年少人口及び生産年齢人口は減少、老年人口は増加傾向にあり、少子高齢化は進行しています。

年齢3区分人口の推移

区分	年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成26年
総人口		117,634人	118,803人	117,724人	116,818人	116,611人	116,263人
年少人口	(0～14歳)	21,714人	19,408人	17,545人	16,144人	15,771人	15,470人
	割合	18.5%	16.3%	14.9%	13.8%	13.5%	13.3%
生産年齢人口	(15～64歳)	78,607人	79,178人	76,568人	74,202人	71,042人	67,932人
	割合	66.9%	66.7%	65.0%	63.6%	61.1%	58.4%
老年人口	(65歳以上)	17,149人	20,217人	23,610人	26,387人	29,506人	32,860人
	割合	14.6%	17.0%	20.1%	22.6%	25.4%	28.3%

※総人口は、年齢不詳を含むため合計は必ずしも一致しない。資料：国勢調査、
平成26年は市町年齢別推計人口（山口県）



資料：国勢調査、平成26年は市町年齢別推計人口（山口県）

(2) 出生の状況

本市の出生数は、平成2年に1,177人でしたが、平成22年には1,085人となっています。

合計特殊出生率*は、平成25年は1.76で全国平均と山口県平均を上回っていますが、現在の人口を維持するのに必要とされる2.08を大きく下回っています。

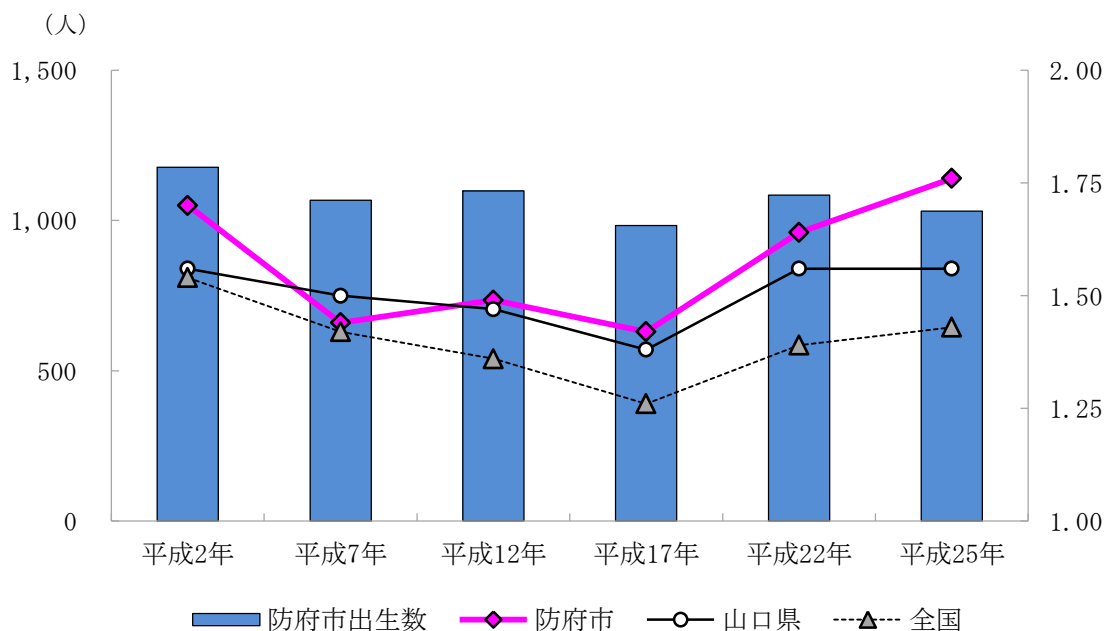
出生数と合計特殊出生率の推移

		平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成25年
出生数（人）		1,177	1,067	1,098	983	1,085	1,031
合計特殊出生率	防府市	1.70	1.44	1.49	1.42	1.64	1.76
	山口県	1.56	1.50	1.47	1.38	1.56	1.56
	全 国	1.54	1.42	1.36	1.26	1.39	1.43

資料：出生数は平成2年のみ住民基本台帳、平成7年以降は住民基本台帳に基づく人口、人口動態と世帯数（総務省）

合計特殊出生率は防府市については保健統計年報（山口県）、市町年齢別推計人口（山口県）より算出
全国・山口県については人口動態調査

出生数と合計特殊出生率の推移



資料：出生数は平成2年のみ住民基本台帳、平成7年以降は住民基本台帳に基づく人口、人口動態と世帯数（総務省）

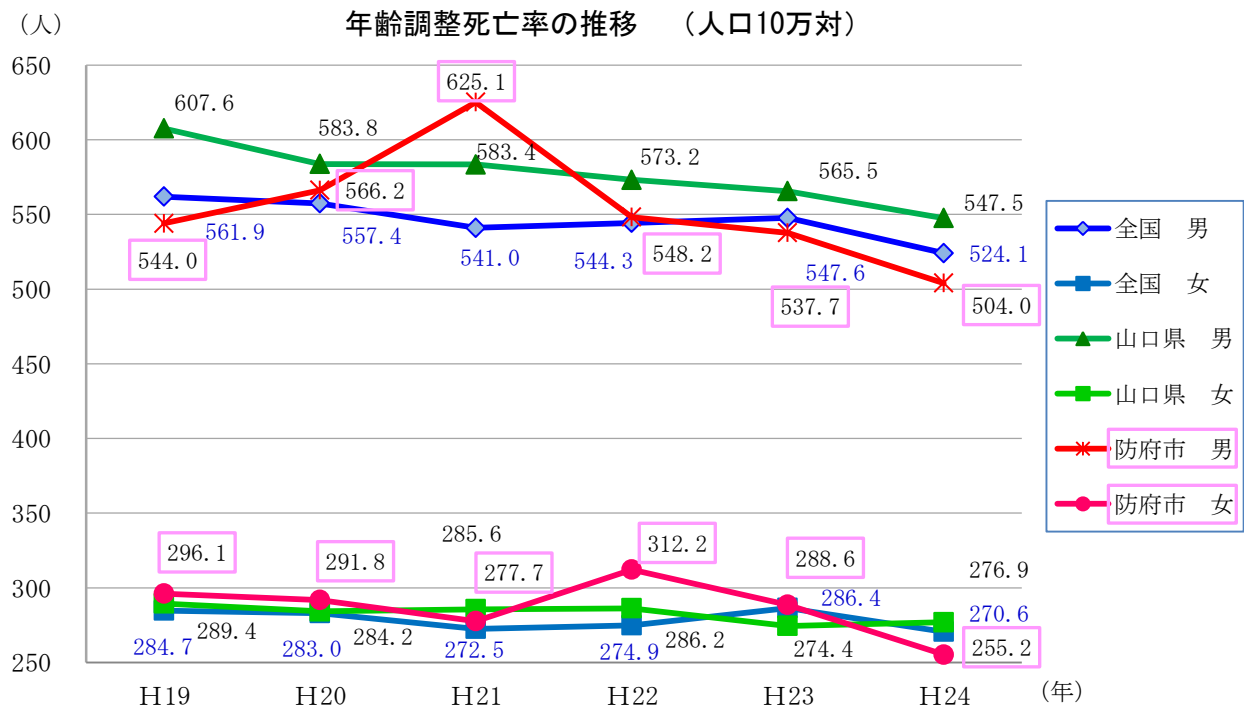
合計特殊出生率は防府市については保健統計年報（山口県）、市町年齢別推計人口（山口県）より算出
全国・山口県については人口動態調査

*合計特殊出生率：一人の女性が、生涯のうちに生む子どもの平均数を示しています。人口を維持するのに必要な合計特殊出生率は2.08とされています。

(3) 死亡の状況

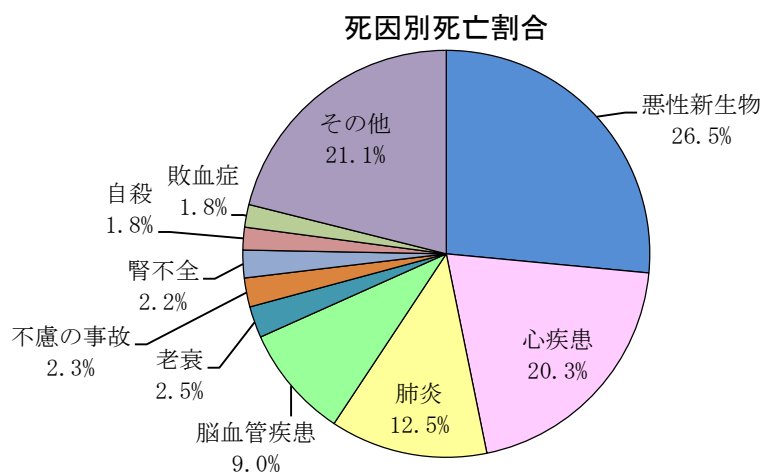
①年齢調整死亡率*の推移（人口10万対）

本市の年齢調整死亡率は、全国・山口県とほぼ同率で推移しています。



②死因別死亡割合

本市の死因第1位は悪性新生物、2位は心疾患、3位は肺炎となっています。三大生活習慣病（悪性新生物・心疾患・脳血管疾患）が60%弱を占めています。



資料：平成24年山口県保健統計年報

*年齢調整死亡率：年齢構成の異なる地域間で死亡状況の比較ができるように、年齢構成を調整した死亡率のことです。

2 各分野の現状

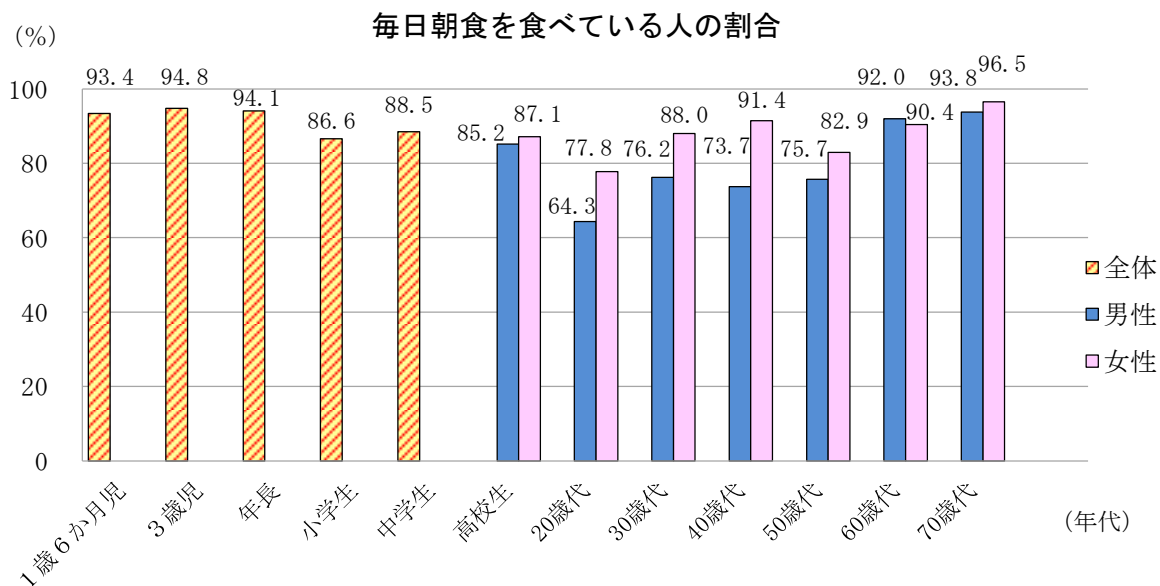
(1) 栄養・食育

(1) -1 栄養

①朝食の摂取状況

1日に必要な全ての栄養を1回の食事ではとることができないため、1日3食きちんと食べることが必要です。そして、1日元気に活動するためには、朝食を毎日食べることがとても大切です。

幼児は90%以上、小学生から高校生までは、85%以上の人々が毎日朝食を食べています。男性は20歳代で64.3%、30～50歳代で75%前後と年齢が上がるにつれて毎日朝食を食べている人の割合は増加しています。女性は20歳代で77.8%と最も低くなりますが、30～40歳代で90%前後となっています。60歳代以降は、男性・女性とも90%以上となっています。



資料：1歳6か月児・3歳児健康診査受診票、学校教育課資料
平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

●市民インタビューより

(20歳代)

- ・毎日朝ごはんを食べない理由

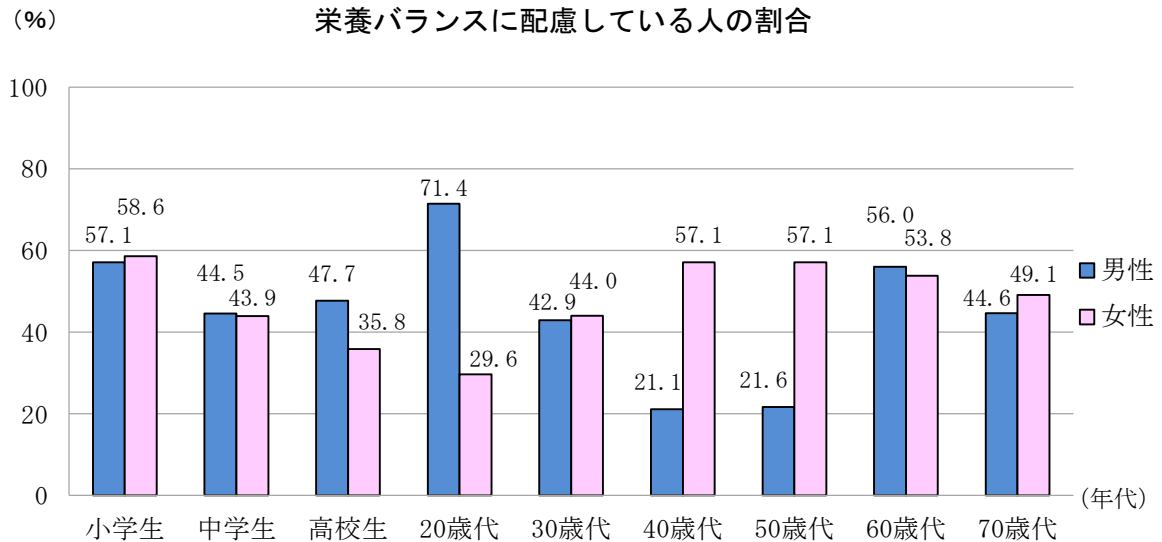
「やせたいから朝ごはんは食べない。」

「子どもの頃からの習慣だから食べなくてもお腹が空かない。」

「一人暮らしを始めて毎日では食べなくなった。でも、運動する日は食べる。」

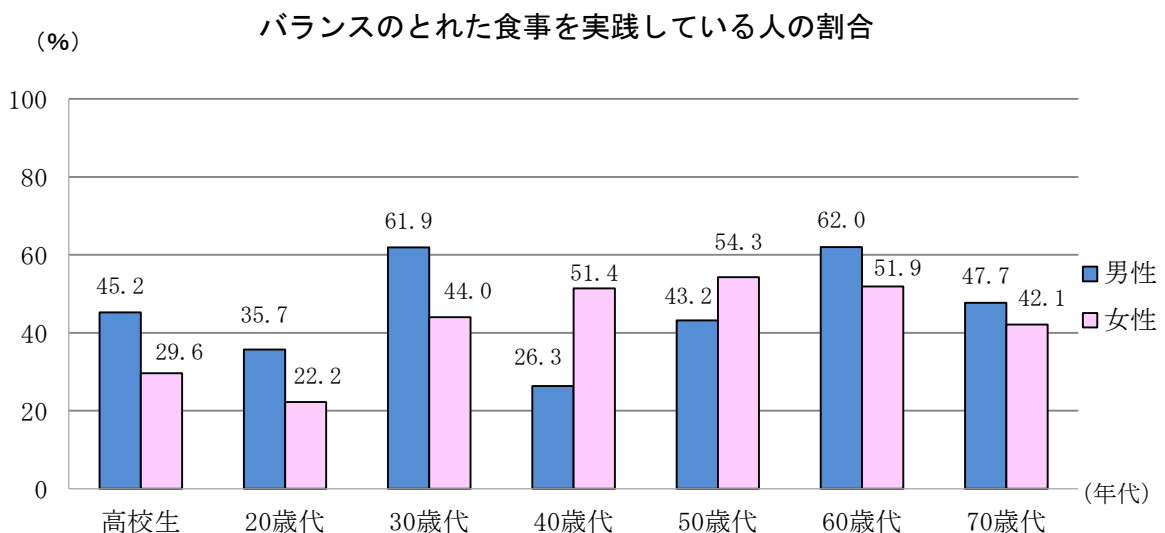
②栄養バランス

栄養バランスに配慮している人の割合は、男性では、20歳代で71.4%と全年代の中で最も高く、40～50歳代では21%程度と低くなっています。女性では、20歳代で29.6%と全年代の中で最も低く、40～50歳代では、57.1%と高くなっています。



資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

バランスのとれた食事を実践している（1日に2回以上主食・主菜・副菜のそろった食事を週に6日以上食べている）人の割合は、20歳代が低く、男性が35.7%、女性が22.2%です。また、40歳代の男性は、26.3%と全年代の中で最も低く、40～60歳代の女性は、50%以上と高くなっています。

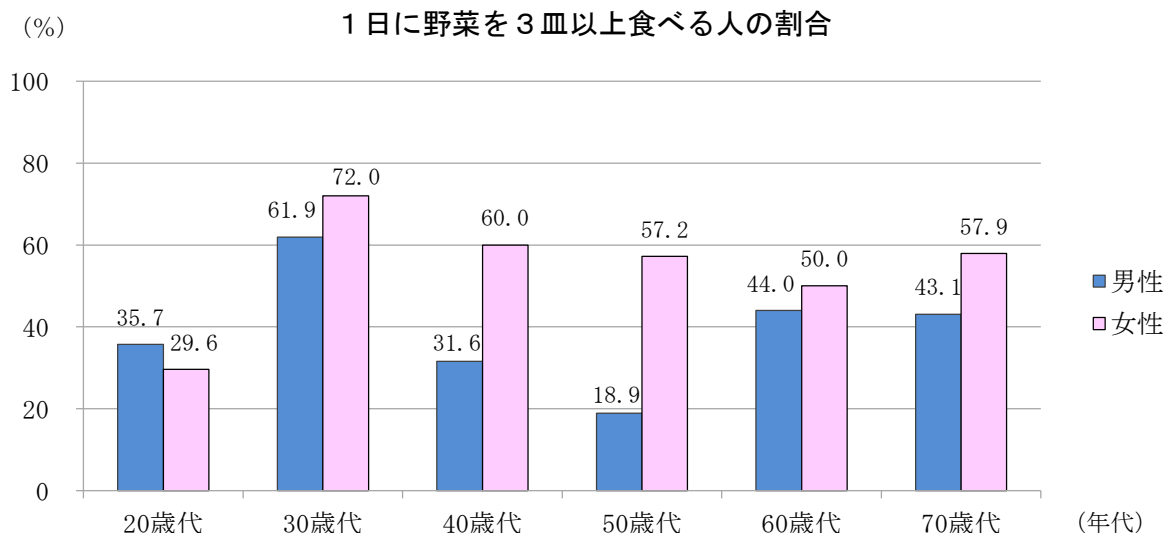


資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

③ 1日の野菜摂取量

1日の野菜摂取量の目標は、成人で350g（1皿70g×5皿）以上です。（P61 参照）

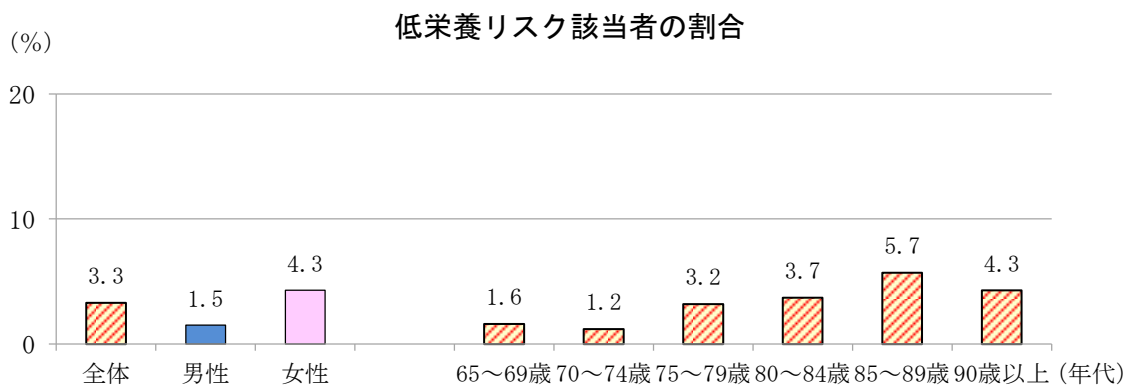
20歳代は、男性で35.7%、女性で29.6%と男性・女性ともに1日に野菜を3皿以上（1皿70g）食べる人の割合が低くなっています。また、男性の40歳代で31.6%、50歳代では18.9%と更に減少しますが、60歳代以降は40%以上と増加しています。しかし、女性は、30歳代以降、1日に野菜を3皿以上食べる人の割合は50%以上に増加しています。



資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

④ 高齢者（65歳以上）の低栄養

全体でみると、高齢者の低栄養リスク該当者（BMI*が18.5未満かつ6か月間で2～3kg以上の体重減少があった人）の割合は、3.3%とごく少数の状況です。全般に低栄養リスク該当者の割合が低いため、性別・年齢区分別の傾向はみられません。



資料：第6期日常生活圏域ニーズ調査報告書

*BMI：身長に対する体重の比で、体格を表す指数です。BMI＝体重（kg）÷身長（m）÷身長（m）

BMIが18.5未満はやせ、25以上で肥満と判定します。

「栄養」のまとめ！

・一番気になる年代は20歳代！

20歳代は毎日朝食を食べる人が少なく、1日の野菜摂取量も少なくなっています。栄養バランスに配慮し、実践している人の割合も、20歳代の女性は他の年代に比べて低くなっています。20歳代の男性は、栄養バランスに気をつけようと意識しているものの、実際にバランスよく食べている人の割合が低くなっています。

・次に気になる年代は40～50歳代の男性！

毎日朝食を食べる人が70%程度と少なく、1日の野菜摂取量は最も少なくなっています。栄養バランスに配慮し、実践している人の割合も低くなっています。

●策定委員から出た意見

親の食習慣は子どもに影響する。

親から子へ、食への関心が持てるように食の大切さを伝え、バランスのとれた食事を実践できる力が身につくといいね。

生活習慣病予防には若い頃からの主食・主菜・副菜のそろったバランスのとれた食生活が欠かせない。食事バランスガイド*の普及が必要なのでは？

まずは、朝ごはんの大切さを知ることが、健康的な食生活の実践につながるのではないかな。

40～50歳代は仕事が忙しく、食に関心が持てていないのかな？

若い世代はもっと食に関心を持ってほしい。野菜や魚等もっと食べてほしいな。



●では、どうしたら良いのでしょうか？

バランスのとれた食事の実践ができる力を小さい頃から身につけることが必要だね。

まずは栄養バランスの大切さを知ることからはじめよう！



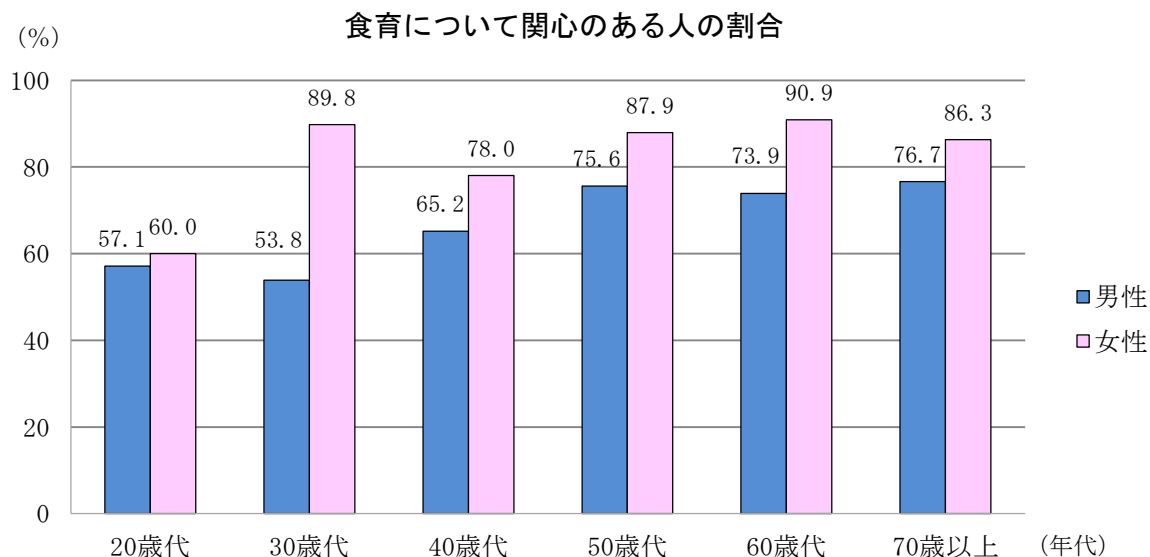
*食事バランスガイド：1日に「何を」「どれだけ」食べたらよいかの目安をわかりやすくコマのイラストで示したものです。（⇒P59 参照）

(1) -2 食育

①食育への関心

食育は、健全な体と心の成長を促し、豊かな人間性を育む基礎となります。

女性の30歳代以降は、食育について関心がある人が78.0～90.9%と高くなっていますが、20歳代は60.0%と低くなっています。また、男性は全年代を通して食育への関心が50～80%程度と女性より低く、中でも30歳代は53.8%と特に低くなっています。

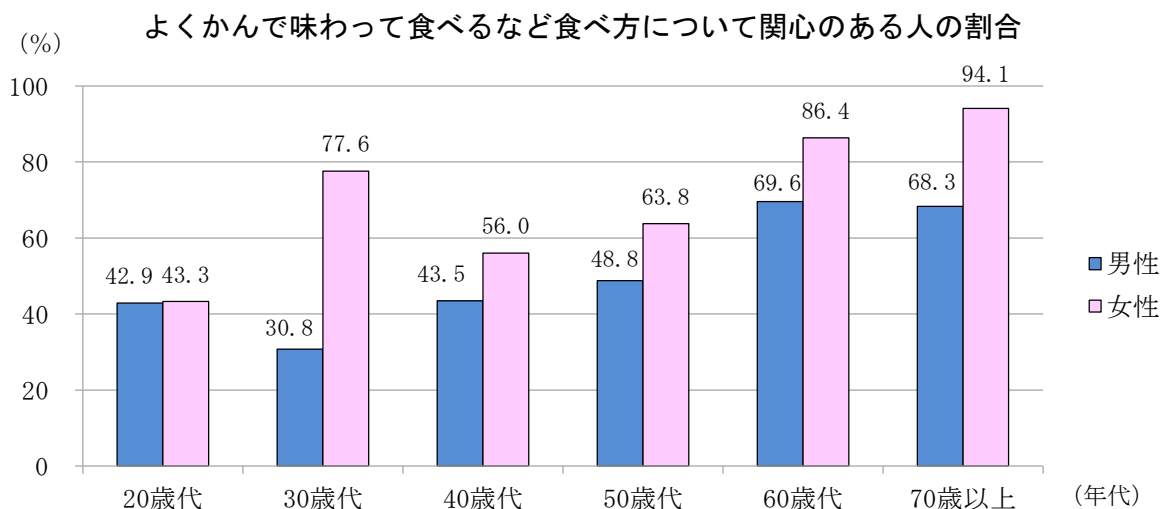


資料：平成25年度「食育」に関する市民アンケート調査

②よくかんで味わって食べる

食べることは体の成長に必要な栄養をとるだけでなく、よくかんで味わうことで、食を楽しむことにもつながります。

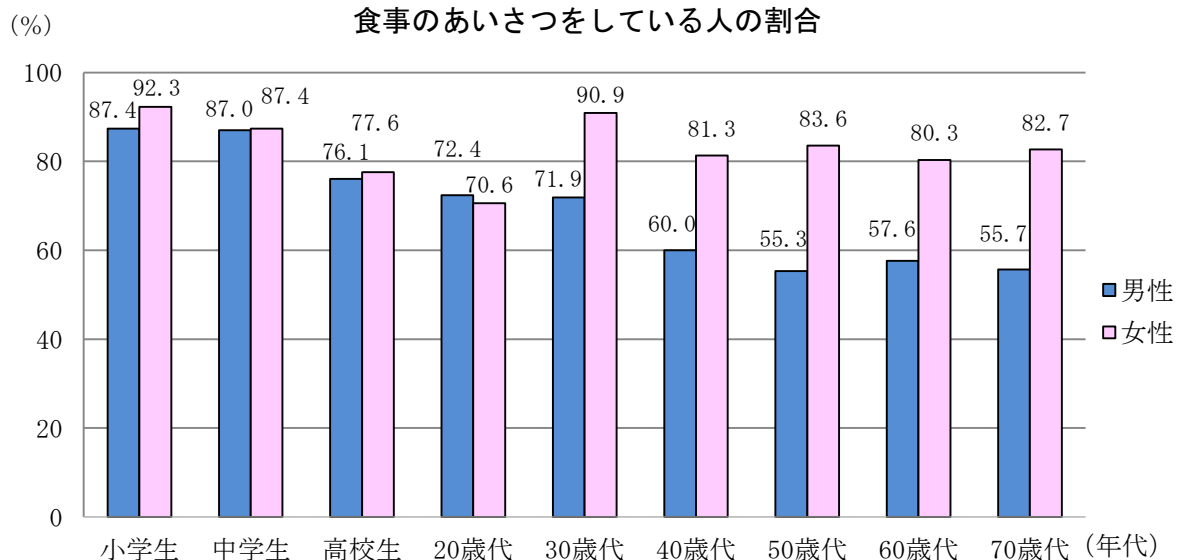
男性は全年代を通してよくかんで味わって食べるなど食べ方に関心がある人の割合が30～70%程度と女性より低く、中でも30歳代は30.8%と特に低くなっています。



資料：平成25年度「食育」に関する市民アンケート調査

③食事のあいさつ

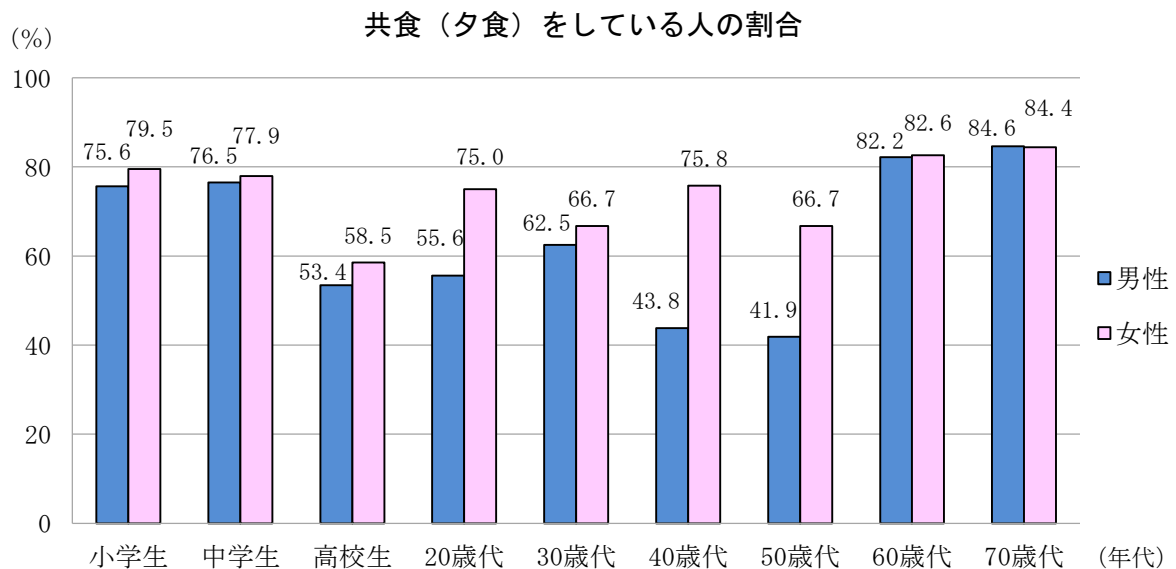
男性は、食事のあいさつをしている人の割合が年齢とともに減少しています。女性はどの年代においても、70.6～92.3%と男性に比べて高くなっています。



資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

④共食*（夕食）

男性は、共食している人の割合は年齢とともに減少していますが、60歳代からは高くなっています。女性は、どの年代においても、58.5～84.4%と男性に比べて高くなっています。

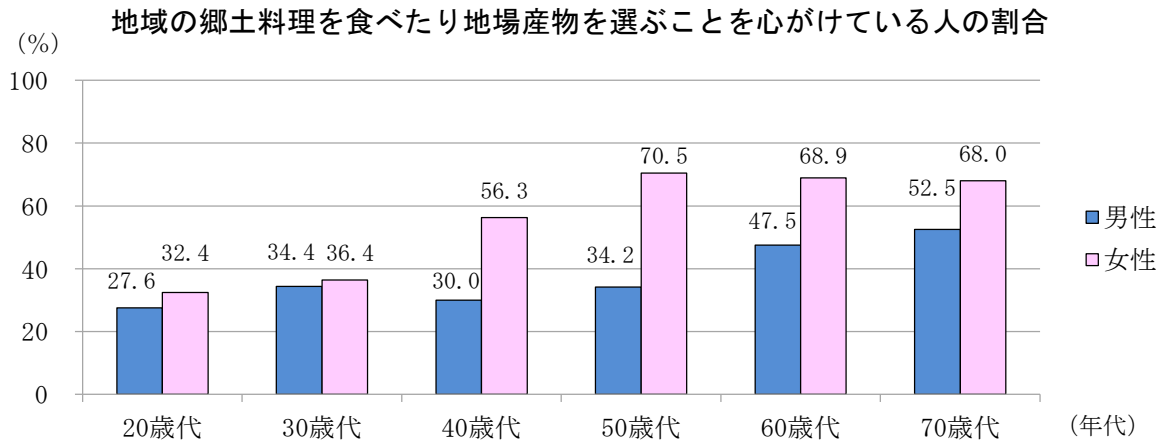


資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

*共食：一人で食べるのではなく、家族や友人、職場の人や地域の人等、誰かと共に食事をすることです。

⑤郷土料理と地産地消

50歳代以降の女性は、68.0～70.5%の人が郷土料理を食べることや地場産物を選ぶことを心掛けています。しかし、20～50歳代の男性、20～30歳代の女性は30%程度と低くなっています。また、女性は男性に比べて、どの年代においても、郷土料理を食べることや地場産物を選ぶことを心掛けている傾向にあります。



資料：平成26年度健康づくりに関する県民意識調査

⑥食の安心・安全

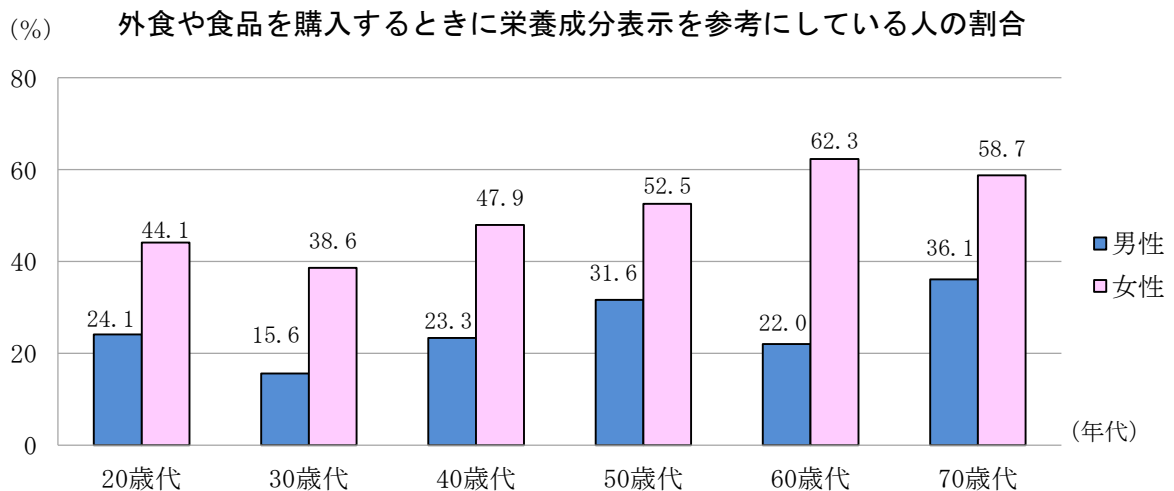
「食の安心・安全講座」参加者数は、平成22年度をピークに減少しています。

「食の安心・安全講座」参加者数の推移

	平成20年度	平成22年度	平成24年度	平成26年度
参加者数(人)	690	780	729	614

資料：山口健康福祉センター防府支所業務概要

外食や食品を購入するときに栄養成分表示を参考にしている人の割合は、50～70歳代の女性では52.5～62.3%と半分以上の人が参考にしています。また、女性は男性に比べて、どの年代においても、栄養成分表示を参考にしている人の割合が高い傾向にあります。



資料：平成26年度健康づくりに関する県民意識調査

「食育」のまとめ！

・若者世代（20～30 歳代）の食育への関心は・・・

食育について関心を持っている人、よくかんで味わって食べるなど食べ方に関心がある人の割合は 20 歳代の男性・女性、30 歳代の男性が低くなっています。郷土料理や地場産物への関心も 20～30 歳代の男性・女性で低くなっています。

・男性の食育の実際は・・・

男性は年齢とともに、食事のあいさつをしなくなり、共食する機会は高校生から 50 歳代にかけて少なくなっています。

●策定委員から出た意見

共食を通して、マナーや食文化等を伝えるだけでなく、楽しく食べることで豊かな心を育むことにつながるね。

農業体験を通して食への関心が持てたらいいね。



自分で魚をさばくなどの調理体験ができる機会を増やしたいね。

食事のあいさつや箸の使い方等、正しい食事のマナーも身につけたいね。

●では、どうしたら良いのでしょうか？

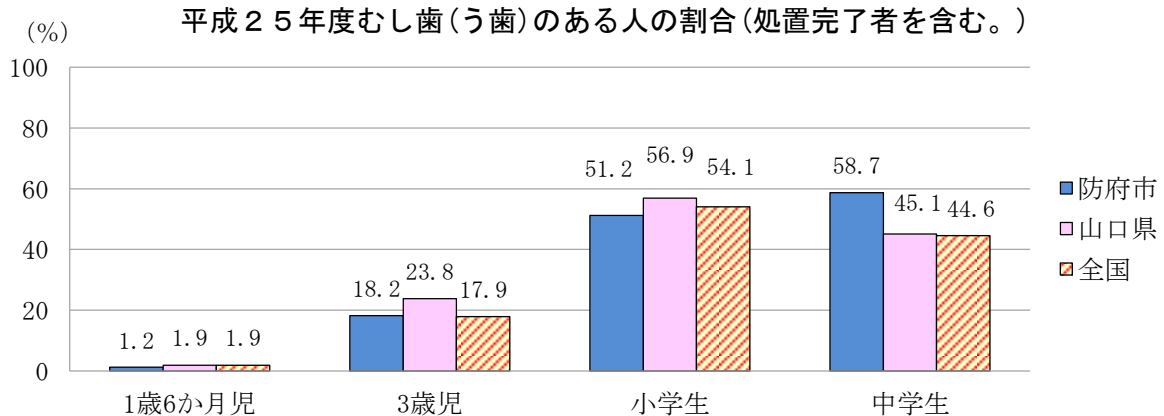
家庭の中だけでなくいろいろな機会や体験を通して食育に関心を持ち、食への感謝の心を育むことが大切！世代を越えて食文化やマナーも伝えられるといいな。



(2) 歯と口の健康

① むし歯（う歯）がある人の割合

むし歯（う歯）がある人の割合（処置完了者を含む。）は、1歳6か月児では1.2%、3歳児では18.2%と山口県平均より低く、小学生は51.2%と山口県・全国平均より低くなっています。しかし、中学生になると58.7%と山口県・全国平均より、むし歯（う歯）のある人の割合は増加しています。

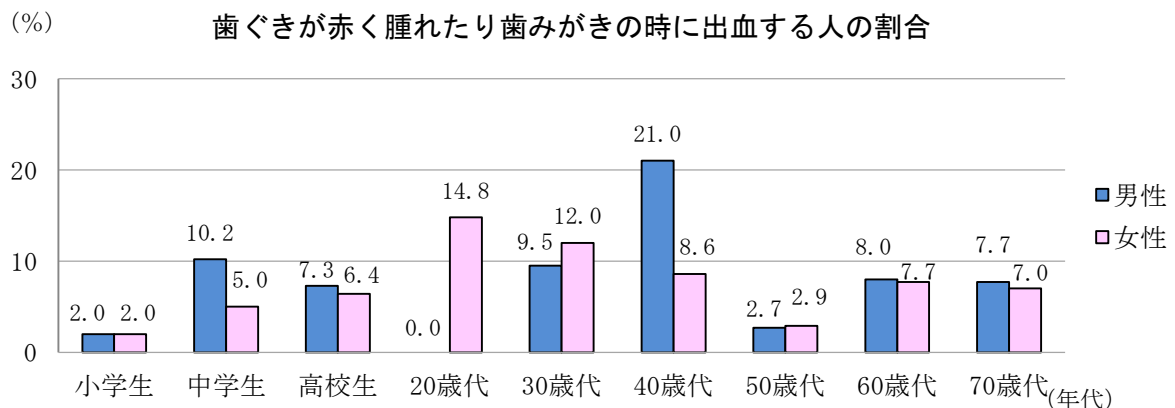


資料：平成25年度全国乳幼児歯科健診の実施状況
平成25年度山口県の母子保健
平成25・26年度防府市児童生徒のからだ

② 歯ぐきの状態

歯ぐきが赤く腫れたり、歯みがきの時に出血したりするなどの歯肉に炎症が起きた状態が続くと、歯周病*になる可能性があります。歯周病は、肺炎を引き起こす原因になったり、生活習慣病を悪化させたりするなど、全身の健康と深く関係します。

男女とも歯ぐきが赤く腫れたり、歯みがきの時に出血したりする人は、小学生からいます。また、成人になると男性は40歳代で21.0%、女性は20歳代で14.8%と増加しています。

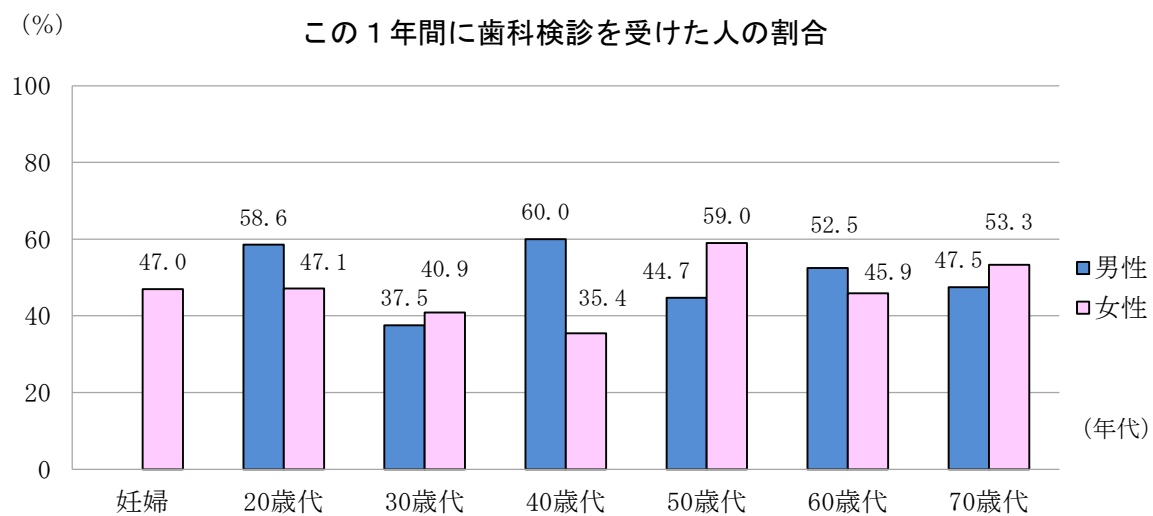


資料：平成26年度防府市児童生徒のからだ
平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

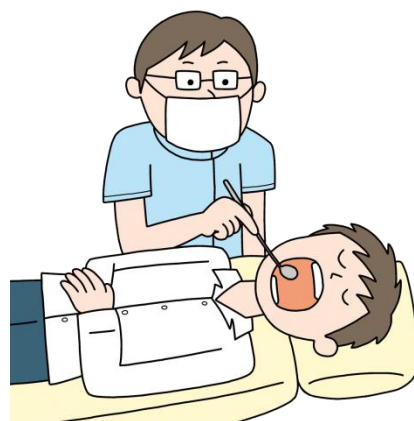
*歯周病：歯のまわりにある組織のいずれか、またはすべてに炎症が起こる疾患の総称です。歯周病は食習慣や歯磨き習慣、喫煙等に関連しているため、最近では生活習慣病と位置づけられています。

③歯科検診*

この1年間に歯科検診を受けた人は、男性・女性ともに35～60%程度です。



資料：平成26年度健康づくりに関する県民意識調査
平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査



* 歯科検診：むし歯（う歯）や歯周病のチェックを中心に、口の中全体の状態について確認します。

「歯と口の健康」のまとめ！

・むし歯（う歯）のある人の割合は・・・

山口県や全国に比べ、むし歯（う歯）のある人の割合は小学生までは低くなっていますが、中学生になると高くなります。

・歯の状態は・・・

小学生から歯ぐきが赤く腫れたり、歯みがきの時に出血したりする人がいます。

・歯科検診は・・・

この1年間に歯科検診を受けた人は、男性・女性とも半数程度と少なくなっています。



●策定委員から出た意見

子どもの頃は学校で歯科検診があるから、ほぼ100%の受診率なのに、大人になると半数の人しか受けていないよね。



中学生・高校生になると部活等で忙しくて歯と口への関心も薄くなる。一人暮らしになると、「だらだら食べ」になり、むし歯になりやすいよね。まずは歯と口の健康に関心を持ってもらうことが大切かな。

歯ぐきの症状がある人のアンケート結果は、あくまで自己申告なので、本当はもっと多いのではないかな。

耳に残る標語を作ったり、インターネット等で情報発信してみてもどうだろう？



●では、どうしたら良いのでしょうか？

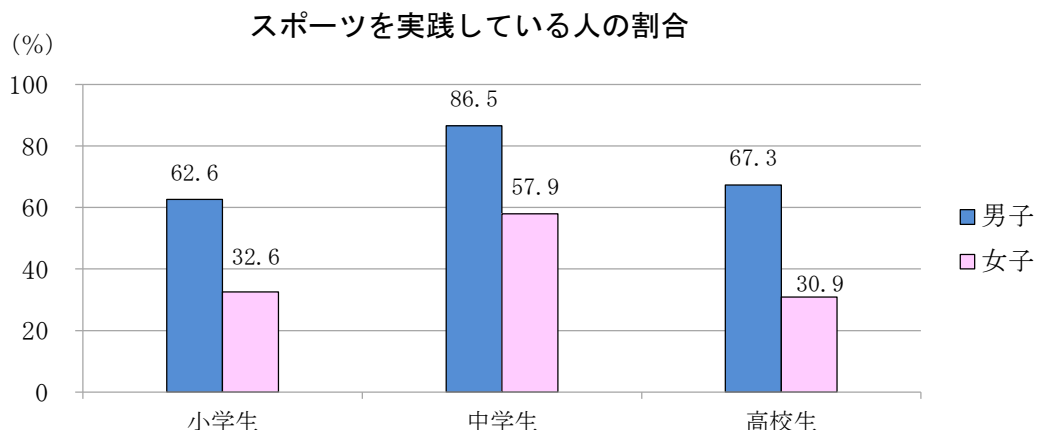
歯と口の健康に関心を持って、定期的に歯科検診に行くことが必要だね。



(3) 身体活動・運動

①スポーツを実践している人

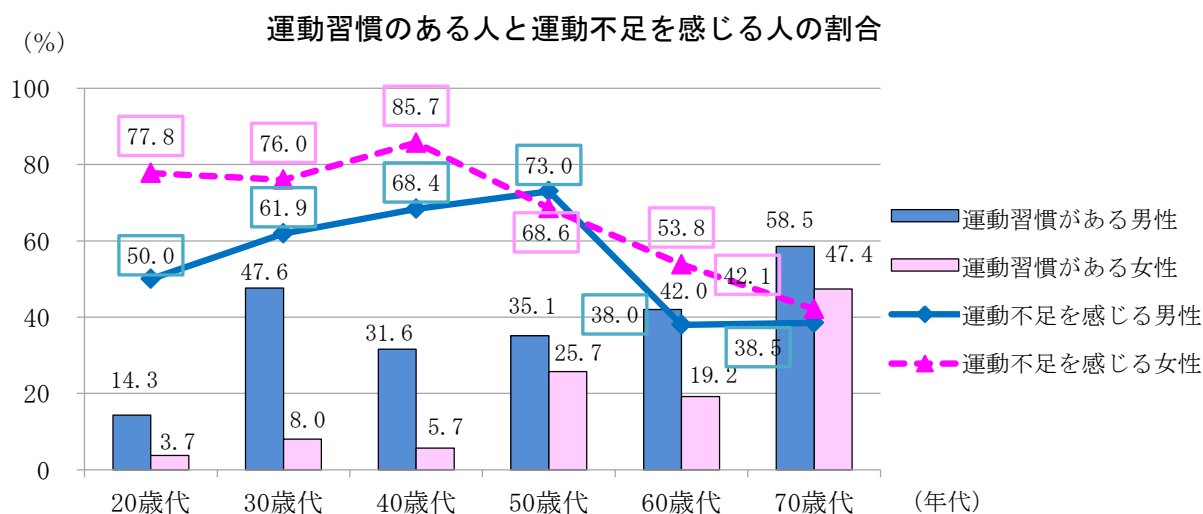
スポーツを実践している人の割合は、小学生で男子 62.6%、女子 32.6%と、小学生の頃から男女差があり、男子のほうが女子よりスポーツをしている人の割合が高くなっています。



資料：防府市民のスポーツ活動に関するアンケート調査
平成 26 年度計画（第 2 次）策定のためのアンケート調査

②運動習慣のある人

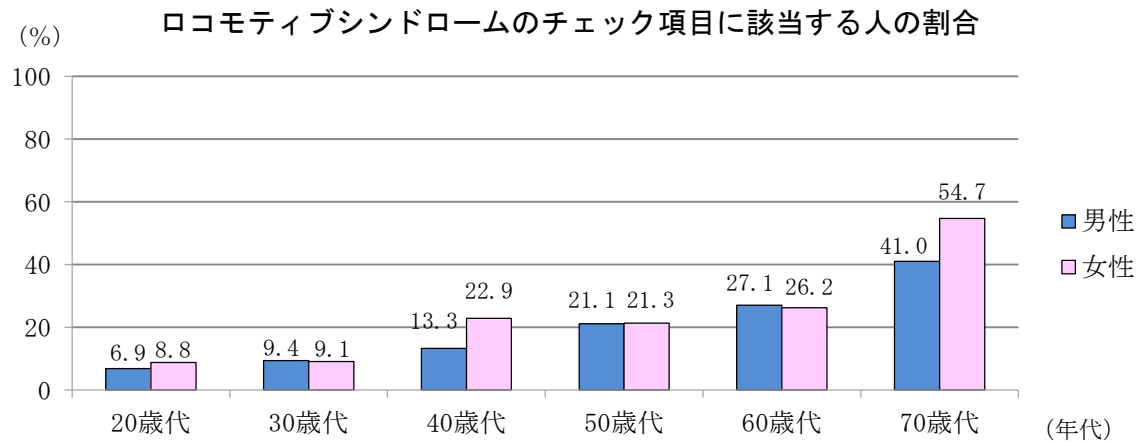
生涯を通して男性 14.3～58.5%、女性 3.7～47.4%と、男性のほうが運動習慣のある（1 日 30 分以上、週 2 回以上運動している）人の割合が高くなっています。男性は、30 歳代に比べ、40～50 歳代で運動習慣のある人が減少し、運動不足を感じる人が増加しています。女性は、20～40 歳代で運動不足を感じる人が 70%を超えていますが、運動習慣のある人は 10%にも満たない状況です。しかし、男性・女性とも 50～60 歳代から運動習慣のある人が増加しています。



資料：平成 26 年度計画（第 2 次）策定のためのアンケート調査

③ロコモティブシンドローム*に該当する人

ロコモティブシンドロームのチェック項目に1つでも該当する人は、男性は50歳代から20%を超え、70歳代になると40%を超えています。女性は40歳代から該当する人が20%を超え、70歳代になると50%以上が該当しています。



資料：平成26年度健康づくりに関する県民意識調査

〈参考〉ロコモティブシンドロームのチェック項目

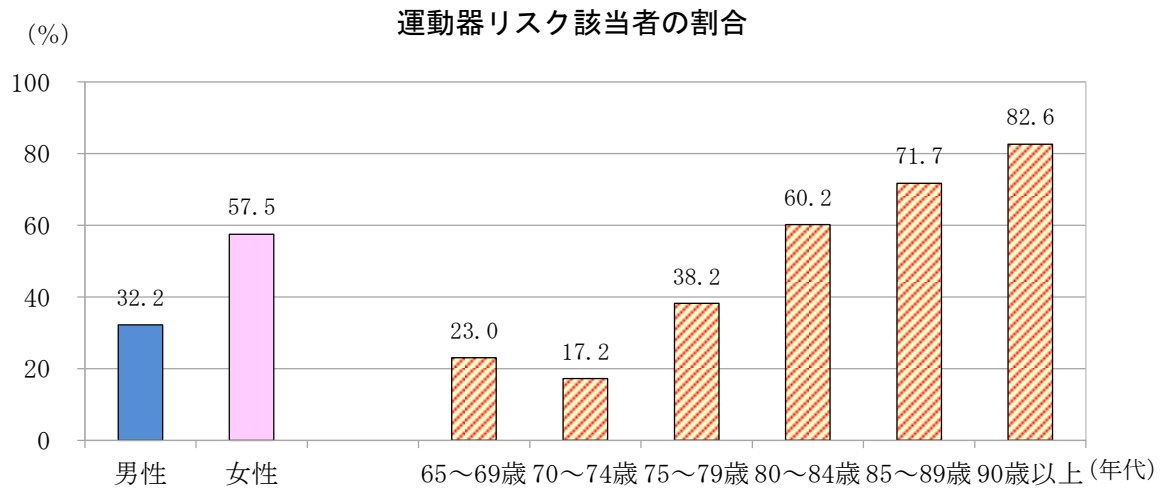
下記の7項目について、1項目でも該当する場合、「ロコモティブシンドロームに該当する人」（以下「ロコモ該当者」という。）として判定

チェック項目
1 片足立ちで靴下がはけない
2 家の中でつまずいたり滑ったりする
3 階段を上がるのに手すりが必要である
4 横断歩道を青信号で渡りきれない
5 15分くらい続けて歩けない
6 2kg程度（1ℓ牛乳パック2個程度）の買い物をして持ち帰るのが困難である
7 家でのやや重い仕事（掃除機の使用、布団の上げ下ろし等）が困難である

*ロコモティブシンドローム：運動器（筋肉、骨、関節等）の障害によって、要介護になるリスクの高い状態のことをいいます。加齢に伴って起きる筋力低下やバランス能力の低下等があげられ、転倒しやすくなります。通称は「ロコモ」といいます。

④運動器リスク該当者の割合

65 歳以上の人の運動器リスク該当者の割合は、男性 32.2%、女性 57.5%となっており、女性 は男性よりも運動器リスク該当者の割合が高くなっています。また、全体を年齢階級 別に見ると、80 歳以上で急激に増加する傾向がみられます。



資料：第6期日常生活圏域ニーズ調査報告書

〈参考〉運動器リスク該当者評価方法

下記の5項目について、3項目以上該当する場合、「運動器リスク該当者」として判定

設 問	該当する選択肢
1 階段を手すりや壁をつたわずに昇っていますか	いいえ
2 椅子に座った状態から何もつかまらずに立ち上がっていますか	いいえ
3 15分位続けて歩いていますか	いいえ
4 この1年間に転んだことがありますか	はい
5 転倒に対する不安は大きいですか	はい

「身体活動・運動」のまとめ！

・学生の頃の運動習慣は・・・

女子よりも男子のほうがスポーツをしている人が多くなっています。

・大人の運動習慣は・・・

男性・女性とも運動をする人の割合が減ります。運動習慣のある人の割合は、特に20歳代の男性、20～40歳代の女性が非常に少なくなっています。70歳代になると、男性の約60%、女性の約50%が運動をするようになります。

・「ロコモ該当者」は・・・

70歳代では男性の40%、女性の50%が「ロコモ該当者」となります。男性は50歳代、女性は40歳代から約20%の人が「ロコモ該当者」となっていますが、20歳代からすでに該当する人もいます。

●策定委員から出た意見

「ロコモ該当者」になってから運動するのではなく、若いうちから、気軽にできる運動を生活に取り入れていくことが大切なのは。

体を動かすことが好き、楽しいという気持ちがないと続かないな。習慣になれば続くよね。

運動が習慣化するには、一緒に運動する仲間がいることも大切なポイントだね。

まずは自分の体に意識を向けて、自分の体の状態を知ることが大切だね。

いつでも、どこでも、誰でもできるような簡単な体操を作ったらいいのではないだろうか。

あえてスポーツをするのではなく、今よりちょっと意識して体を動かすといいのでは。エレベーターではなく階段を使うとか、車で行くところを自転車で、行くようにするといいかもね。



●では、どうしたら良いのでしょうか？

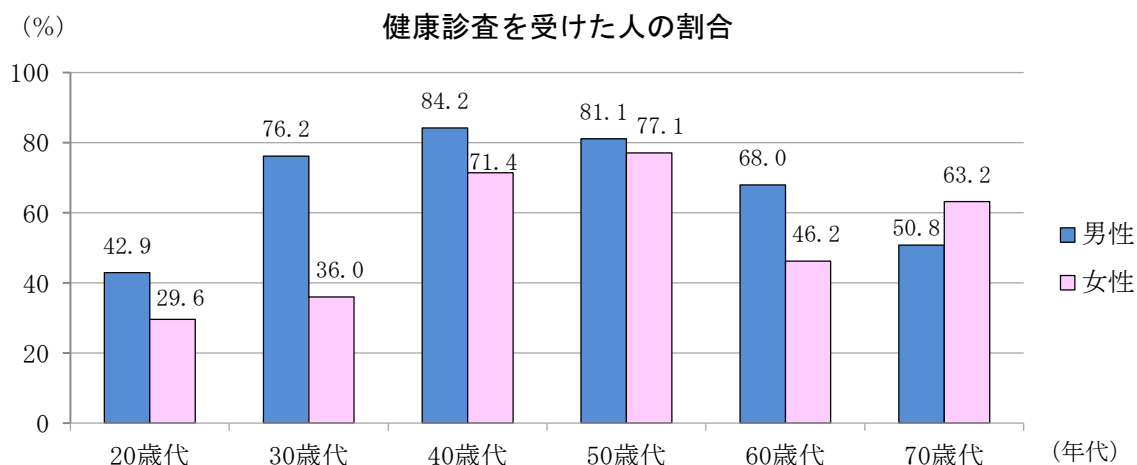
若い頃から、スポーツだけでなく、いつでもどこでも意識して体を動かすことが必要だね。



(4) 日頃の健康管理

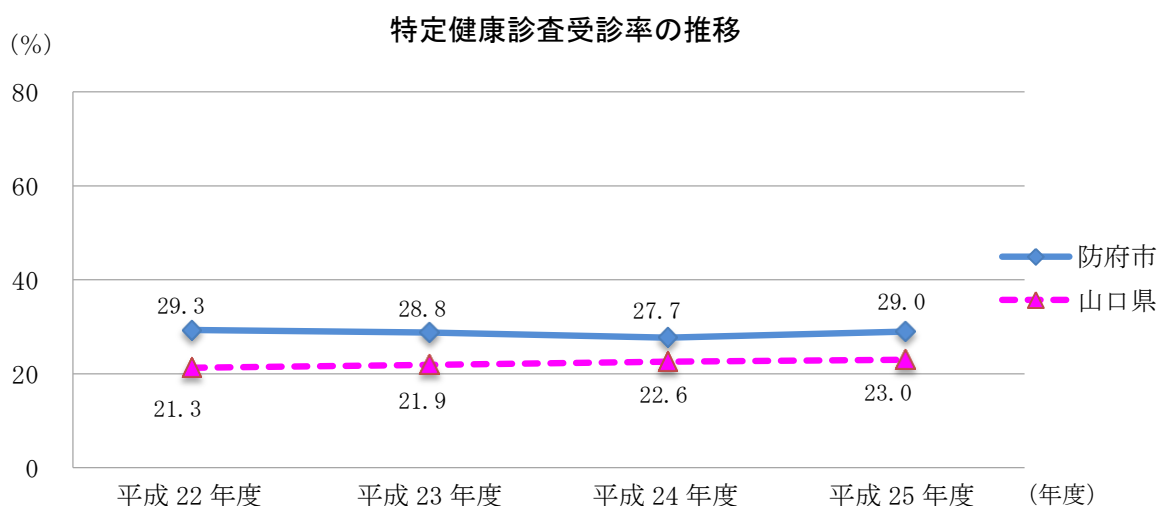
①健康診査（がん検診を除く。）

20歳代で健診を受ける人の割合は、男性が42.9%、女性が29.6%と全年代の中で最も低くなっています。40～50歳代になると、受診率は男性・女性とも70%以上と高くなりますが、60歳代からは男性・女性とも受診率が低下し、70%以下となっています。



資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

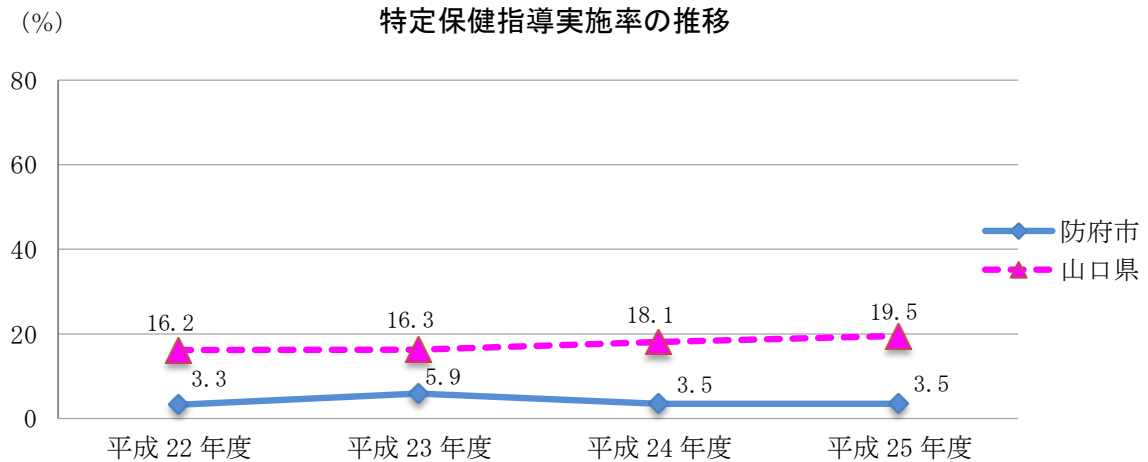
防府市国民健康保険が実施する特定健康診査*（40～74歳）受診率は、山口県平均を上回っていますが、30%以下と低い状況で推移しています。



資料：特定健診等データ管理システム

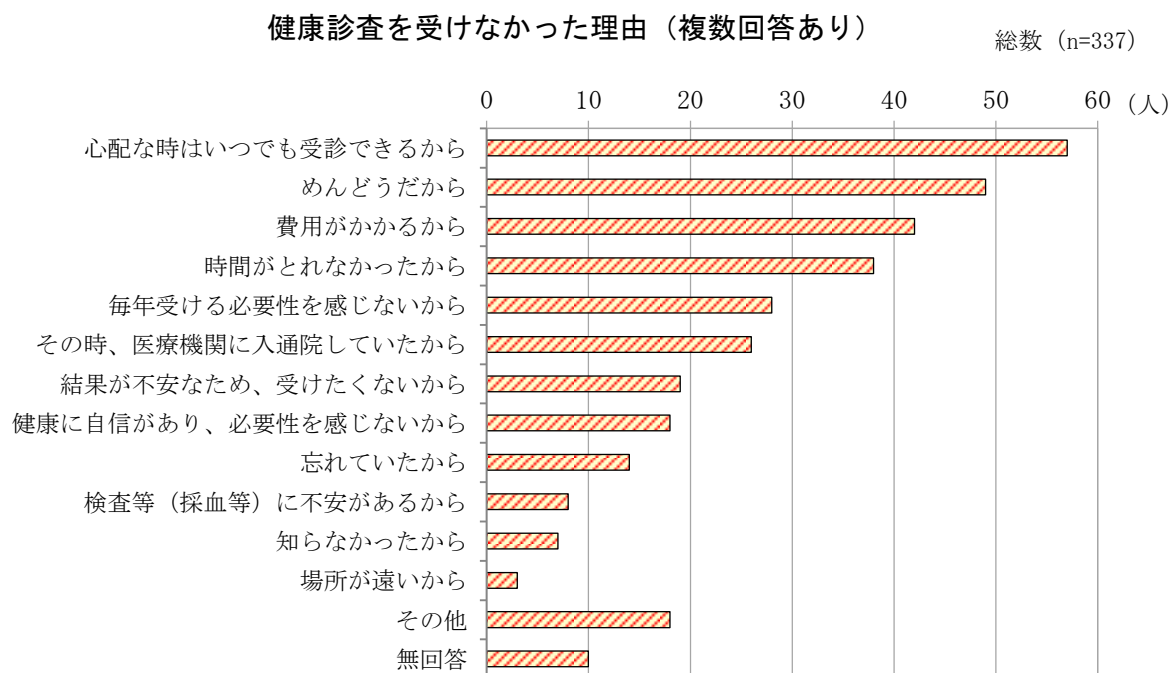
*特定健康診査：生活習慣病を予防するために平成20年度から開始した、メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）に着目した健診です。対象年齢は40～74歳で血液検査や尿検査、医師の診察等を行います。

特定健康診査受診後、生活改善が必要となった人に行われる特定保健指導*実施率は、山口県平均を大きく下回り、平成25年度は3.5%で県内13市中最下位となっています。



資料：特定健診等データ管理システム

健康診査を受けなかった理由は、「心配な時はいつでも医療機関を受診できるから」、「めんどうだから」、「毎年受ける必要性を感じないから」など健診の意義である「早期発見」の必要性の認識不足に関する意見が多くなっています。

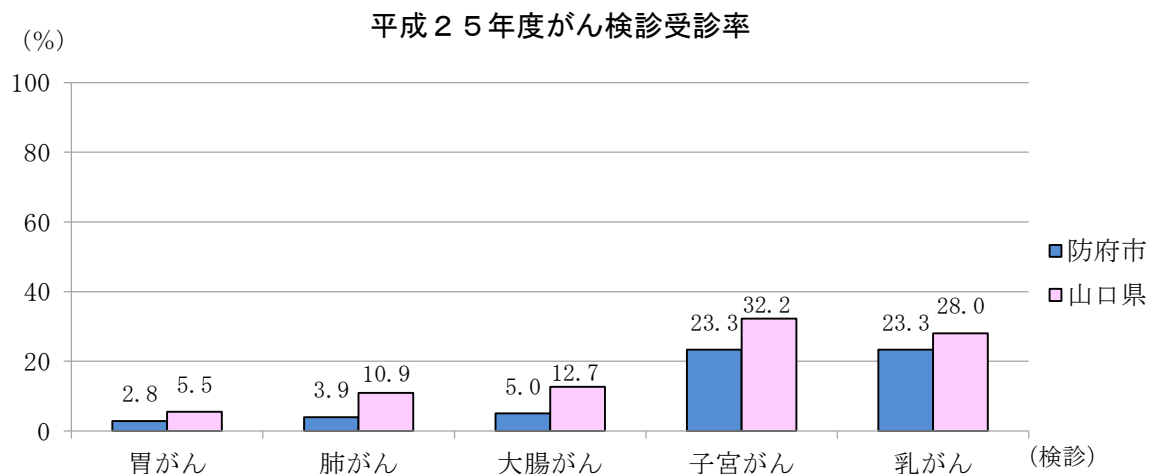


資料：平成26年度健康づくりに関する県民意識調査

* 特定保健指導：特定健康診査の結果から、生活習慣病になるリスクが高く、生活習慣の改善により生活習慣病の予防効果が期待できる人に対して行う支援のことです。医師、保健師、管理栄養士等が実践的なアドバイス等を行い、6か月後に評価をします。

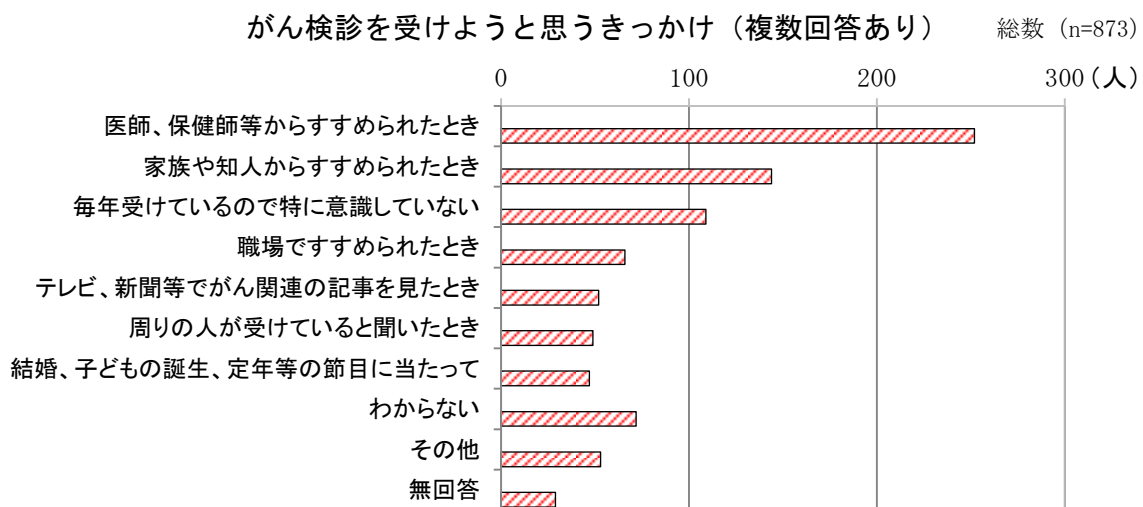
②がん検診

防府市のがん検診の受診率は山口県平均より低く、特に大腸がん検診は5.0%、肺がん検診は3.9%と、県内13市中最下位となっています。



資料：厚生労働省統計一覧

がん検診を受けるきっかけは、医師や保健師等の専門職のすすめが、一番多く挙げられました。また、地域や家族、知人、職場のすすめ等が上位を占めています。



資料：平成26年度健康づくりに関する県民意識調査

●市民インタビューより

(40～50 歳代の女性)

・がん検診を受ける理由

「友人の経験でがんの怖さや治療の辛さなどを知っているから。」

「自分が病気になって家族や周りの人を悲しませたくないから。」

・がん検診を受けない理由

「検診は強制ではないし、検診の悪い結果を知りたくなくて、ついつい先延ばしにしてしまう。」

「検査内容やかかる時間が分からない。検査内容を知らないために負担の大きい検査だと思ひ敬遠している。」

・どうしたら受けるようになるか

「防府市の受診率が低いということを周知してほしい。」

「周囲の人の誘いがあったら受ける。」

「専門家からの指摘があれば受ける。」

「いくつかの検診を合わせた、総合検診なら受ける。」

「日頃の健康管理」のまとめ！

・年代を通してみる健診の受診率の推移は・・・

乳幼児や小・中学生、高校生は、市や学校の健診がありほぼ100%の受診率ですが、20歳代になると約30～40%に激減します。男性は30歳代から、女性は40歳代から約70～80%に増え、60歳代から低くなっています。

・市が行う健（検）診の受診率は・・・

がん検診の受診率は低く、大腸がん検診、肺がん検診の受診率は県内13市中最下位です。

防府市国民健康保険が実施する、血液検査等の項目がある特定健康診査の受診率は約30%と低くなっています。また、特定健康診査受診後に生活改善が必要な人に行われる特定保健指導の実施率も県内13市中最下位です。

●策定委員から出た意見

家庭で日頃から健康に関心を持ち、お互いに声をかけ合うことが大切だね。

健（検）診を受けたらランチ券がつくとか、ポイントがたまったら景品がもらえとか、楽しみがあると良いな。

子ども世代は健診の機会があり、受診率はほぼ100%だが、成人すると激減する。
学校の授業で健（検）診の必要性を伝えることプラス家庭でそれを教えることが必要だね。

女性は、友達と誘い合ったら、健（検）診に行くかな。

男性は、友達と誘い合うことはしない。でも、妻や家族から誘われたら健（検）診に行くかな。

健（検）診を受けることが終わりではない。生活を見直し、自分や家族の体を大切にしよう。

●では、どうしたら良いのでしょうか？

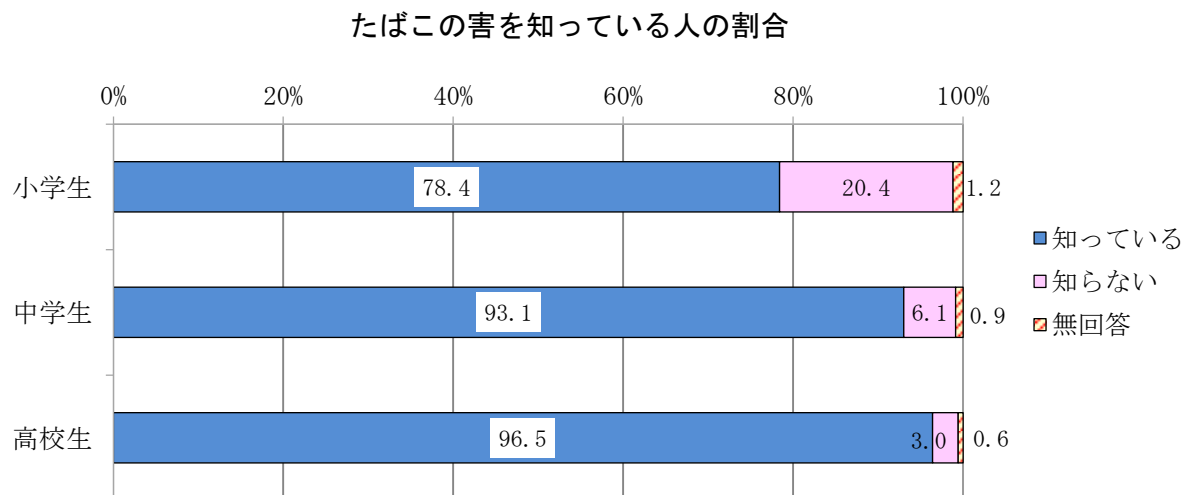
まず健（検）診を受ける必要性を知って、みんなで誘い合って健（検）診を受けることが必要だね。



(5) 喫煙

①たばこの害を知っている人

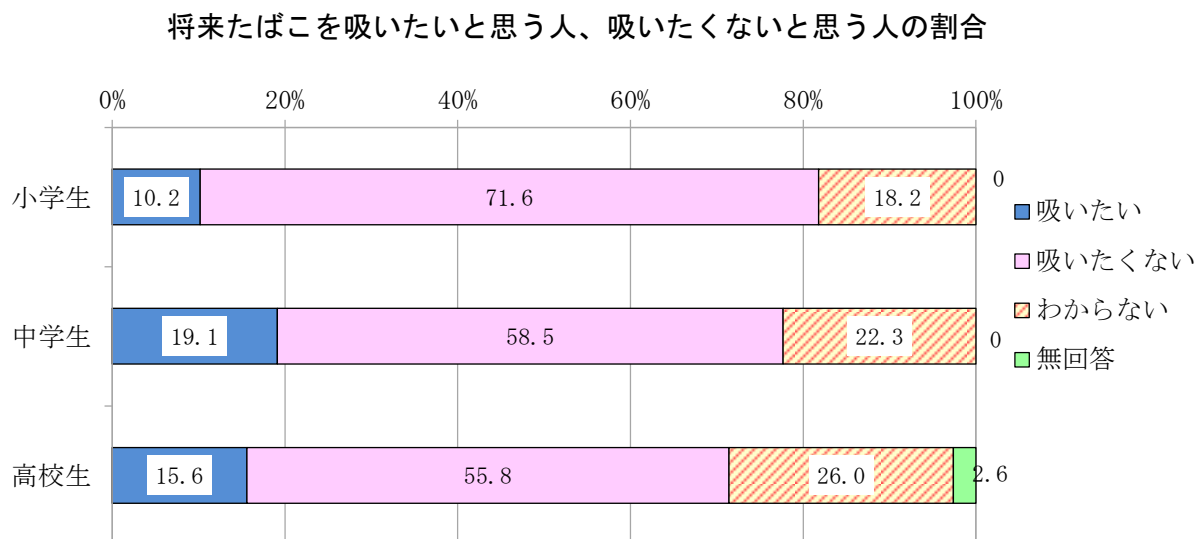
小学生から高校生になるにつれ、たばこの害を知っている人は、78.4%から96.5%と増加しています。



資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

②将来たばこを吸いたいと思う人、吸いたくないと思う人

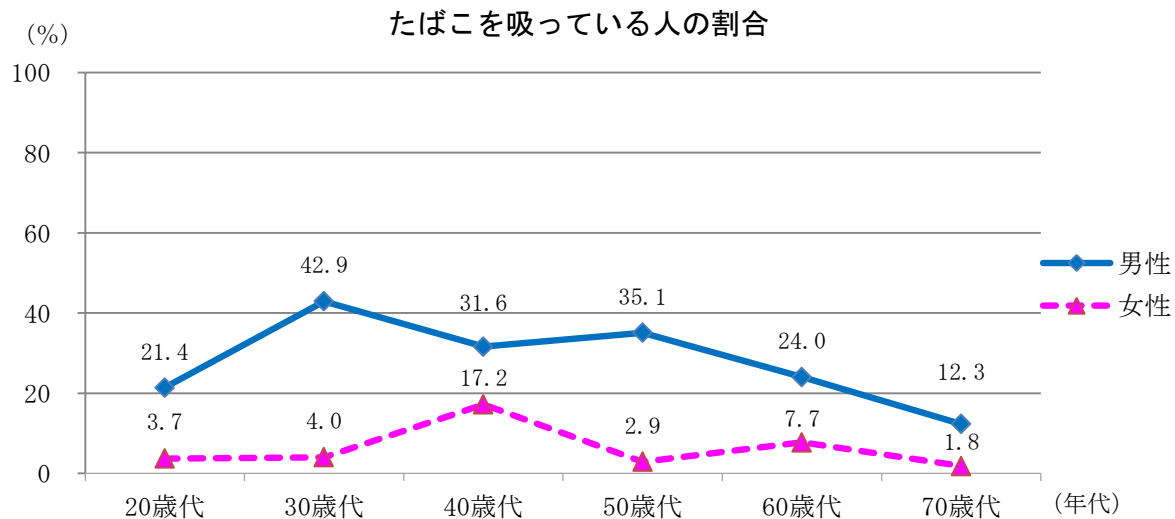
小学生から高校生になるにつれ、「将来たばこを吸いたくない」と答える人は71.6%から55.8%と減少し、「わからない」と迷う人が18.2%から26.0%に増加しています。



資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

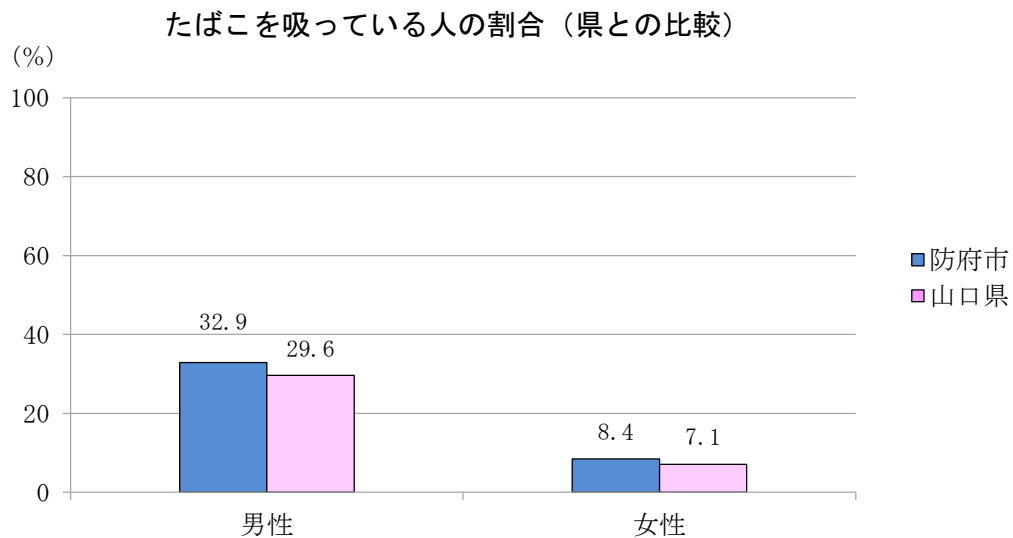
③たばこを吸っている人

たばこを吸っている（たばこを「毎日吸う」「時々吸う」）人の割合は、20歳代で男性は21.4%、女性は3.7%です。男性は30歳代で42.9%、女性は40歳代で17.2%となり、全年代の中で最も高くなっています。



資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

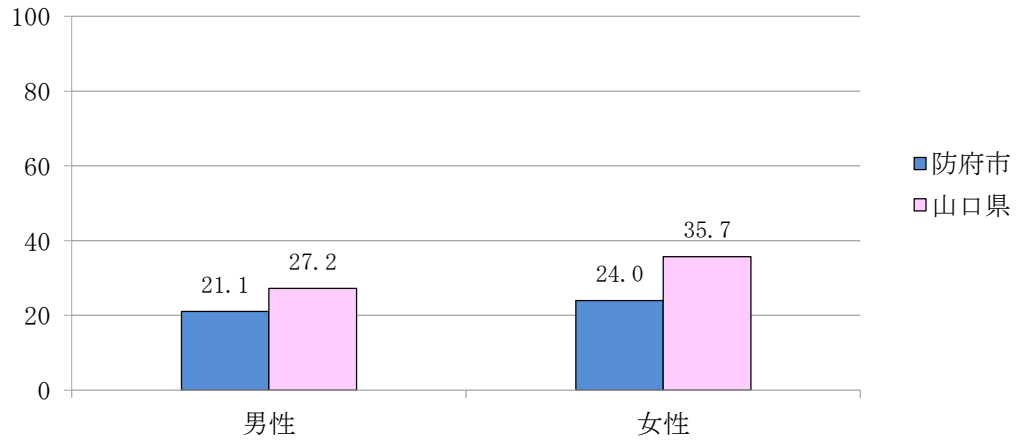
たばこを吸っている人の全体の割合は、男性は32.9%、女性は8.4%です。男性は県内13市中1番高く、女性は県内13市中4番目に高く、男女とも山口県平均と比べ、高くなっています。



資料：平成26年度健康づくりに関する県民意識調査

たばこをやめたいと思っている人の割合は、男性は21.1%、女性は24.0%であり、山口県平均より低く、男性・女性とも県内13市中最低位となっています。

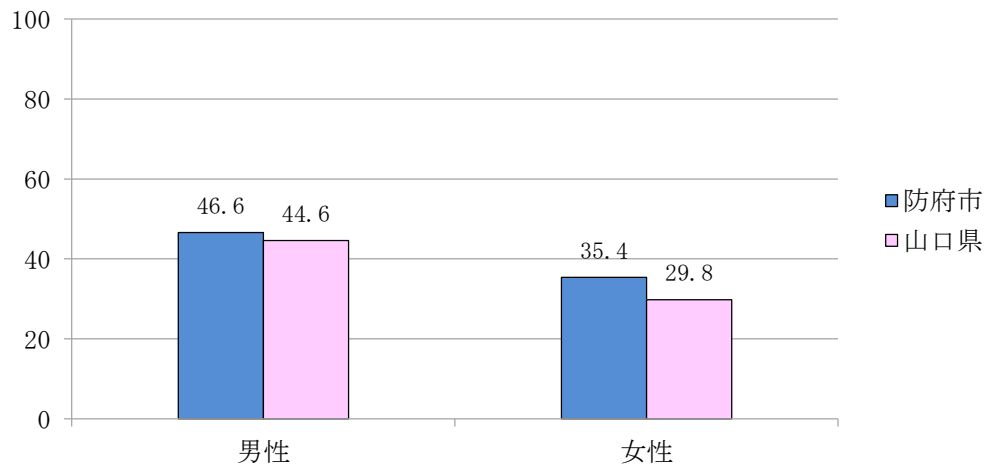
たばこを吸っている人のうち、たばこをやめたいと思っている人の割合
(%)



資料：平成26年度健康づくりに関する県民意識調査

たばこを吸っている人のうち20歳未満から吸い始めた人の割合は、男性は46.6%、女性は35.4%です。男性は県内13市中2番目に、女性は3番目に高く、男性・女性とも山口県平均と比べ、高くなっています。

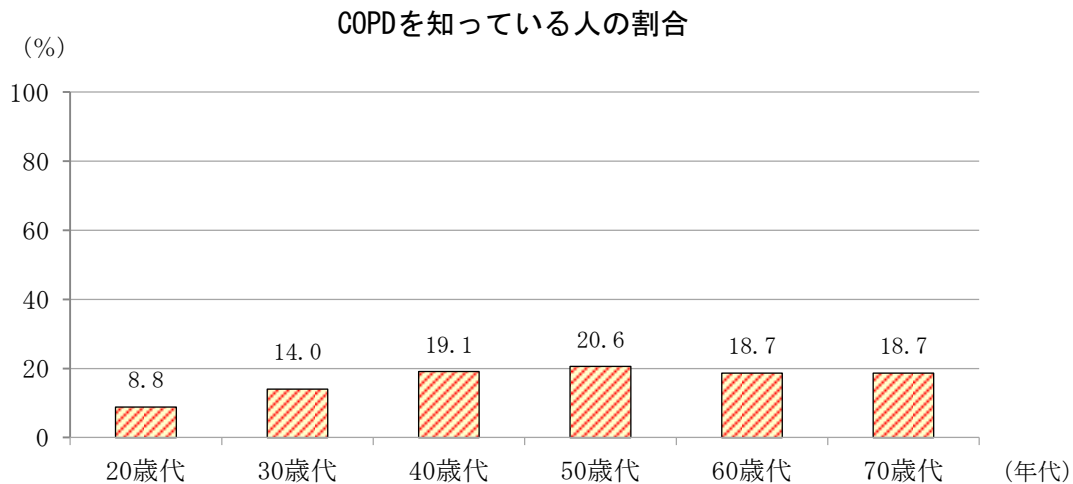
たばこを吸っている人のうち20歳未満で吸い始めた人の割合
(%)



資料：平成26年度健康づくりに関する県民意識調査

④慢性閉塞性肺疾患（COPD）*を知っている人

COPD の認知度は、最も高い 50 歳代でも 20.6%であり、どの年代も低くなっています。



資料：平成 26 年度健康づくりに関する県民意識調査

●市民インタビューより

(20～30 歳代の男性)

- ・ 吸い始めの年齢：17～20 歳
- ・ たばこを吸うきっかけ
 - 「周りが吸っていて興味があったから。」
 - 「周りにすすめられたから。」
 - 「周囲が吸うから。」
- ・ たばこをやめない理由
 - 「やめる理由がないから。」
 - 「特にきっかけがないから。」
 - 「仕事の息抜きとして。」
- ・ どうしたらたばこをやめようと思うか
 - 「彼女に言われたらやめる。」
 - 「医師から強制されたらやめる。」

*慢性閉塞性肺疾患（COPD）：たばこの煙を主とする有害物質を長期間吸入することで生じる肺の炎症による病気です。（⇒P80 参照）

「喫煙」のまとめ！

・子どもの頃のたばこへの関心は・・・

小学生から高校生になるにつれて、たばこの害を知っている人が増えます。しかし「将来たばこを吸いたくない」と答える人が減り、「わからない」と迷う人が増えます。

・現在たばこを吸っている人は・・・

本市の喫煙率は男性・女性とも県の平均より高くなっています。しかしその中で、たばこをやめたいと思う人の割合は低く、また、たばこを吸っている人のうち、20歳未満で吸い始めた人の割合が県の平均より高くなっています。

・たばこを吸ったきっかけは・・・

たばこを吸いたいという強い意志があるわけではなく、周囲の誘いがあった、たばこを吸う環境であったなど、周りの影響が大きいようです。

・慢性閉塞性肺疾患（COPD）を知っている人は・・・

COPDは「たばこ病」とも呼ばれ、長年の喫煙等が原因で肺や気管支の組織が壊れて、呼吸がうまくできなくなってしまう病気です。本市でCOPDを知っている人の割合は、どの年代も約10～20%と低くなっています。

●策定委員から出た意見

たばこを吸い始めると、ニコチン依存症になり、やめるのは難しい。まず、吸わせないことが大切なのでは。

たばこを吸うきっかけは、周囲からの影響が大きい。たばこの誘いを断るなど、「吸わない」と意識した行動をとれるよう、小・中学生、高校生と繰り返し教育し、強い意志を育てたいな。

始めから「吸わせない」ための教育や取組が必要だろう。早い時期からたばこを吸わない教育をしていくことが大切だね。



子どもや孫から「やめて」と言われたらやめられるかもしれない。子や孫のために禁煙にチャレンジしよう。

●では、どうしたら良いのでしょうか？

たばこを吸い始めるとなかなかやめられない。子どもの頃の早い時期から、たばこを吸わせないように教育をすることが大切だね！



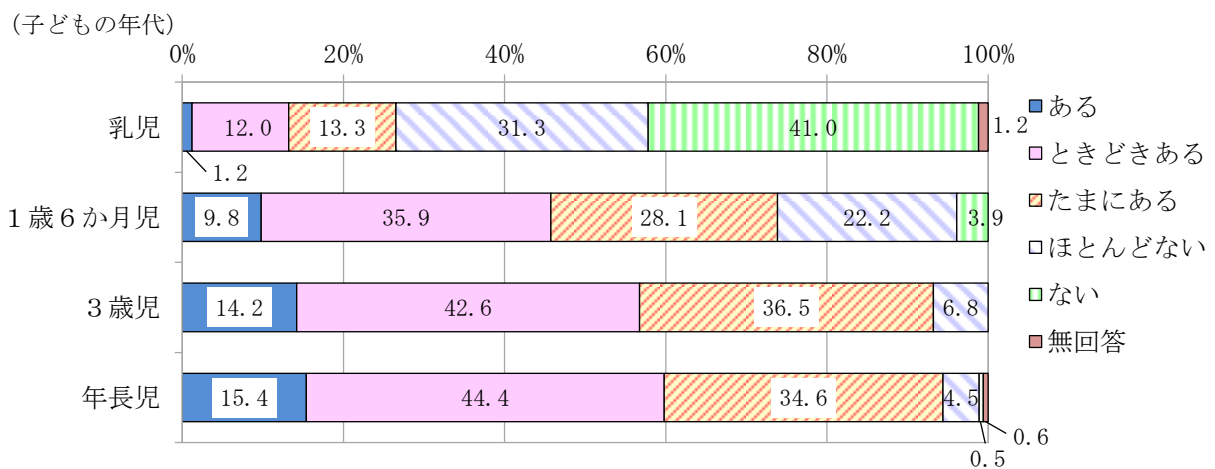
(6) こころの健康

(6) - 1 親のこころ、子のこころ

①育児に関わる母親の現状

子ども（乳幼児）を感情的に怒ってしまう母親（「ある」「ときどきある」と答えた人）の割合は、年齢が上がるにつれて増加し、3歳児の母親は56.8%、年長児の母親は59.8%となっています。

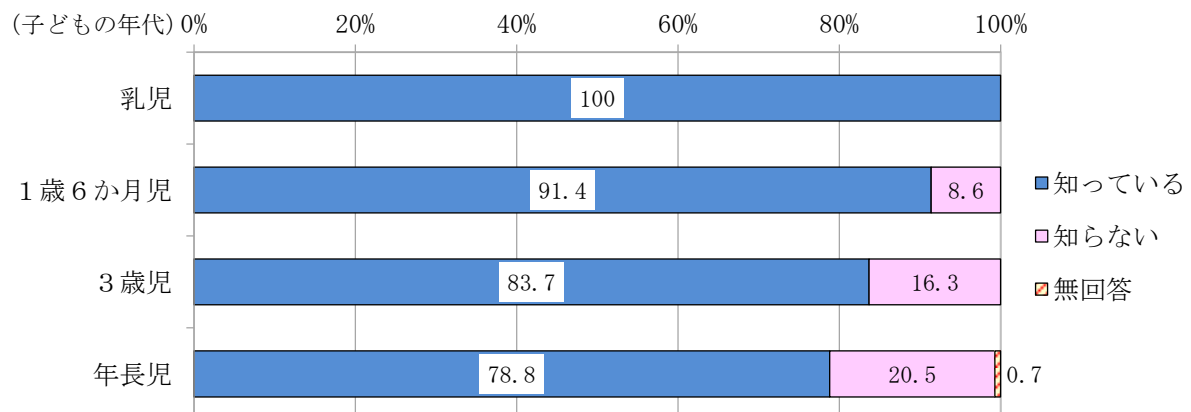
子ども（乳幼児）を感情的に怒ってしまうことがある母親の割合



資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

子ども（乳幼児）に対して、育てにくさを感じている母親のなかで、育てにくさを感じた時に相談先を知っているなど、何らかの解決方法を知っている母親の割合は、年齢が上がるにつれて減少し、年長児の母親は78.8%となります。

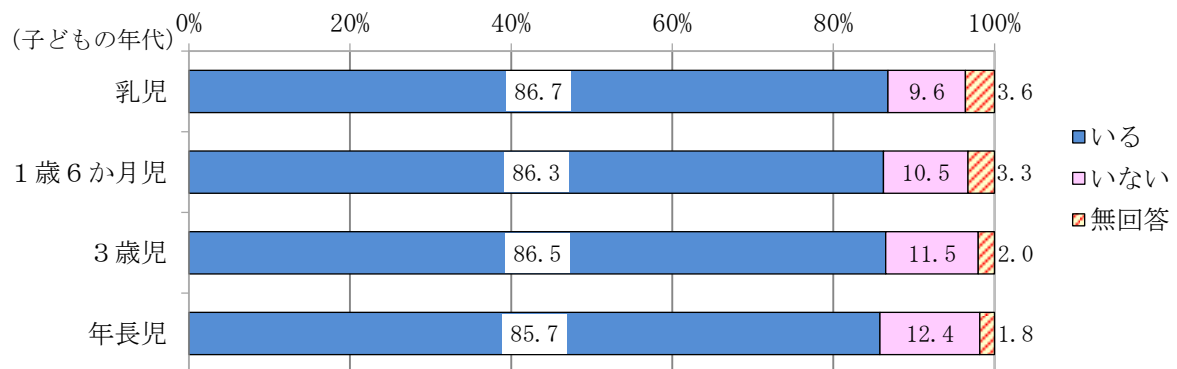
育てにくさを感じた時に、なんらかの解決方法を知っている母親の割合



資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

必要時に子ども（乳幼児）を預かってくれる人がいる母親は85%以上います。しかし、約10%の人が預かってくれる人がいないと回答しています。

必要時に子ども（乳幼児）を預かってくれる人がいる母親の割合

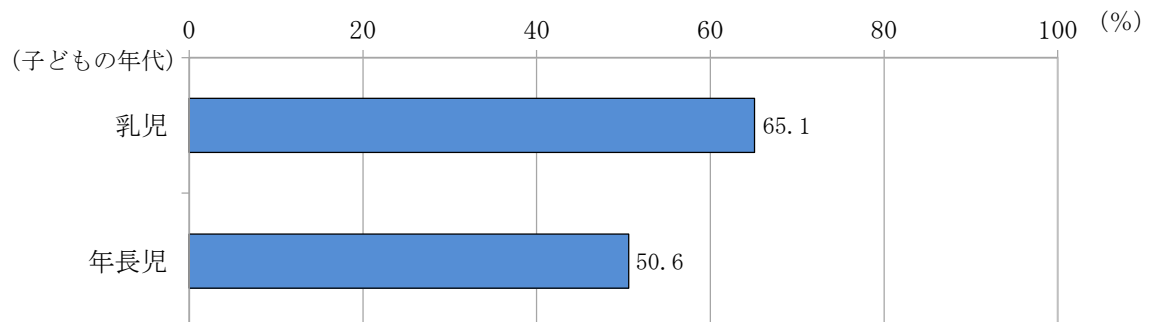


資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

②育児に関わる父親の現状

主体的に育児に関わっている父親の割合は、乳児の時より年長児の方が減少し50.6%となります。

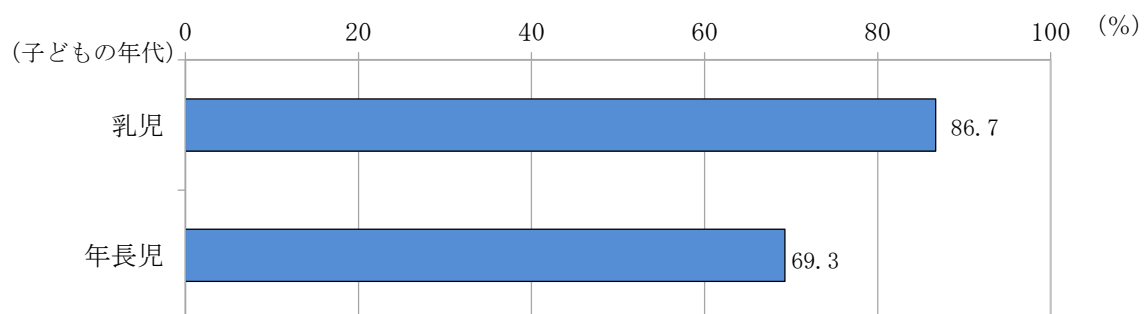
主体的に育児に関わっている父親の割合



資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

家族みんなで過ごす時間を持つように心がけている父親は、乳児の時は86.7%ですが、年長児になると69.3%に減少します。

家族みんなで過ごす時間を持つように心がけている父親の割合



資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

③子ども（乳幼児）を虐待しているのではないかと思う親の割合

子ども（乳幼児）を虐待しているのではないかと思う親（母親自身又はパートナー）の割合は、乳児の親は0%ですが、年齢が上がるにつれて増加し年長児の親は4.8%になります。

子どもを虐待していると思うことがある親の割合

子どもの年代	虐待していると思う親の割合
乳児	0%
1歳6か月児	2.6%
3歳児	4.1%
年長児	4.8%

資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

「親のころ、子のころ」のまとめ！

・子育て中の親は・・・

乳児から年長児まで子どもの年齢が上がるにつれて育てにくさを感じている人の割合は増加します。それに伴い子どもを感情的に怒ってしまう母親の割合が増え、虐待をしていると思うことがある親の割合も増加します。育児の悩みの内容が複雑になるにも関わらず、何らかの解決策を知っている人の割合が減少します。また、父親が主体的に育児に関わっている人の割合が、乳児65.1%から年長児50.6%に減少します。

●策定委員から出た意見

親が忙しくて、子どもの話が聴けていないのでは？
子どもに愛情をしっかりと伝えてほしいな。

父親や祖父母等も育児に協力していくことは必要だね。

育児中の母親にも、リフレッシュの時間は必要だね。いろんな子育て情報を知って上手に利用して行ってほしいな。

子育て中の親に、いろいろな情報を伝えていくことは大切！
母親も情報を求めているよ。

育児で困ったときに相談できる人、場所があることは大切だね。

防府は工場や自衛隊があり、子育て世代で転出入がある地域。孤立して育児している人が心配だね。

小さい子どもや母親に、声をかけたり、温かく見守ることのできる地域になるといいな。

●では、どうしたら良いのでしょうか？

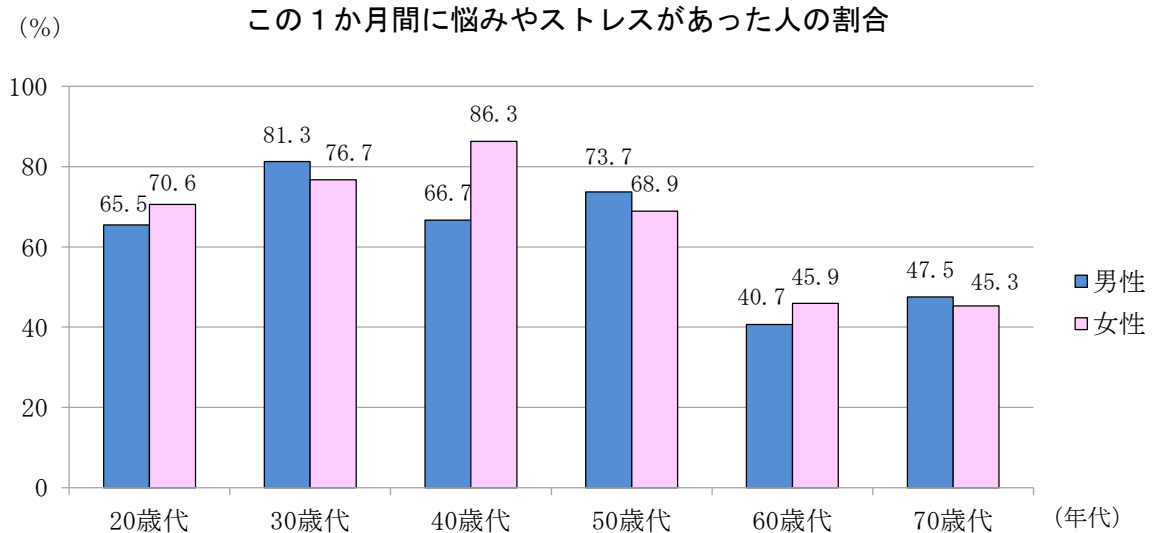
親が安心して子育てができるように、家族や地域で協力していくことが大切だね。



(6) -2 みんなのころ

①悩みやストレスがある人

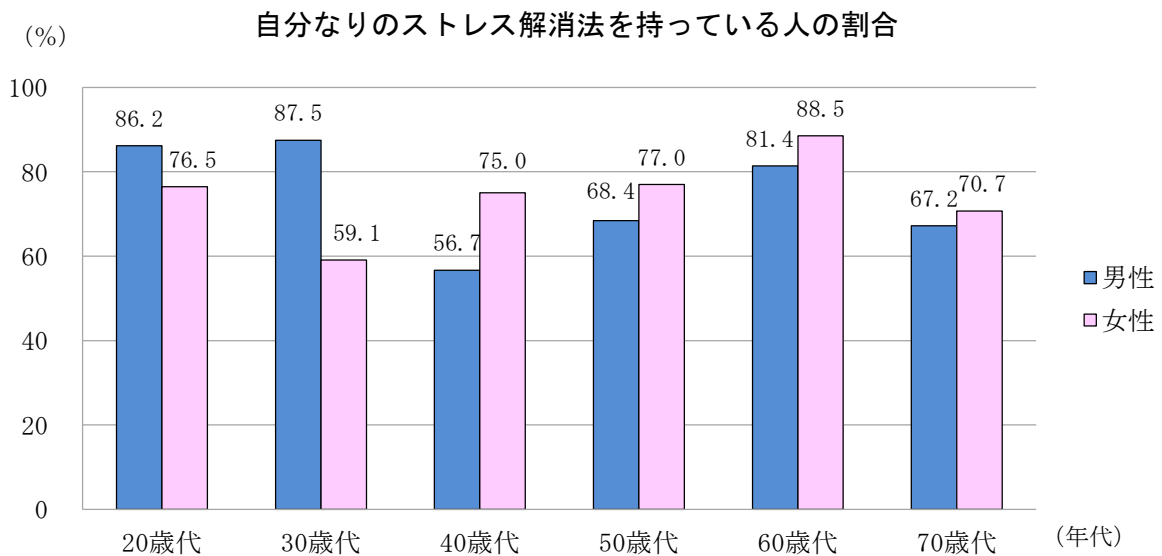
この1か月間に悩みやストレスがあった人の割合は、働く年代（20～50歳代）で65.5～86.3%います。60歳代になると、男性40.7%、女性45.9%に減少します。



資料：平成26年度健康づくりに関する県民意識調査

②自分なりのストレス解消法を持っている人

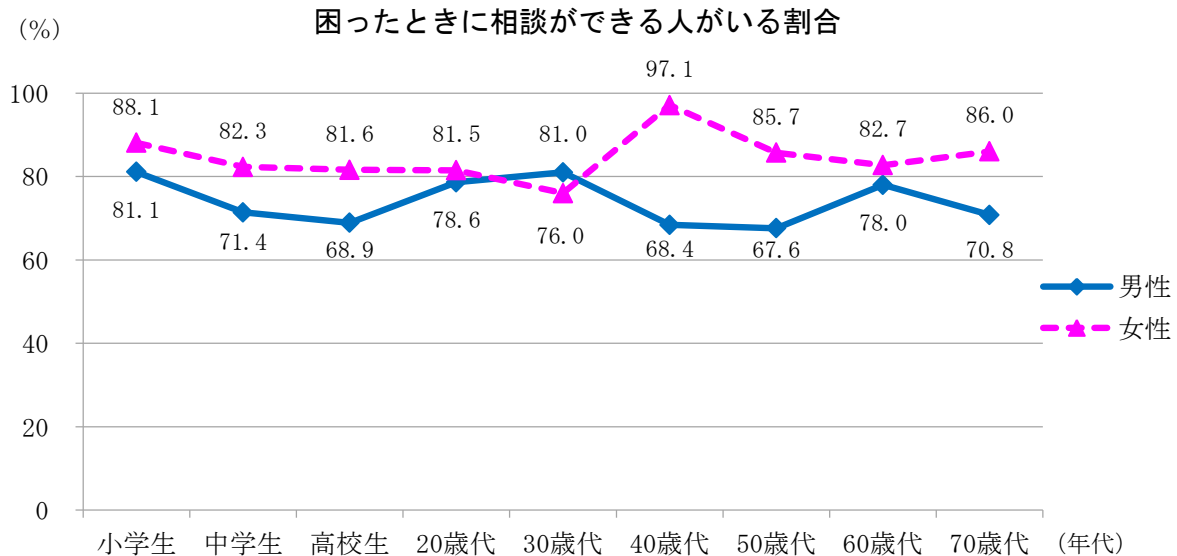
自分なりのストレス解消法を持っている人の割合は、男性では、20～30歳代は85%以上と高くなっていますが、40歳代になると56.7%と減少し全年代で最も低くなります。女性では30歳代が最も低く59.1%となっています。



資料：平成26年度健康づくりに関する県民意識調査

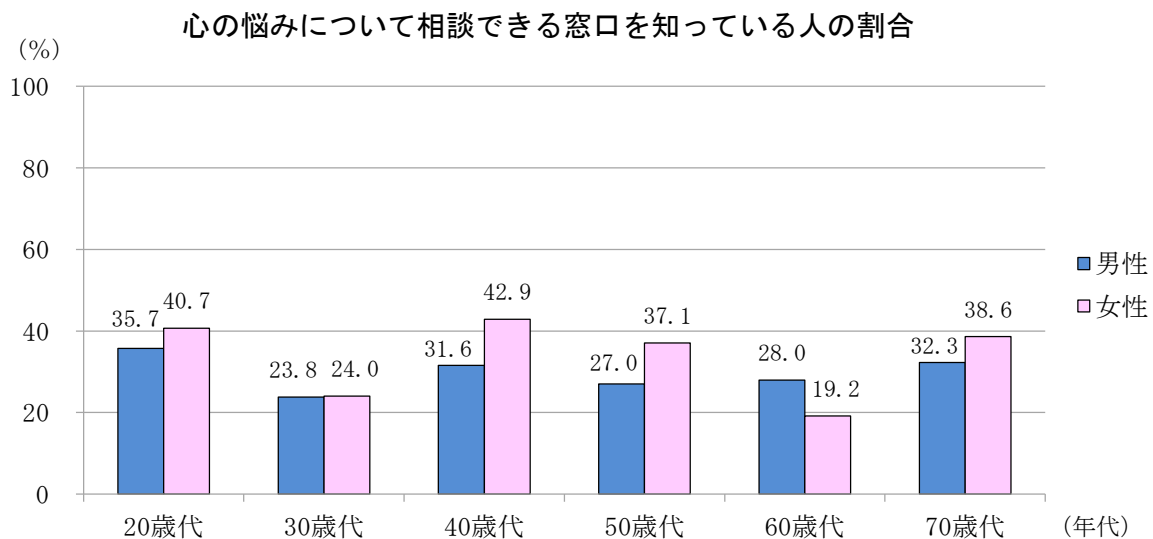
③困った時の相談先

困った時に相談ができる人がいる割合は、男性は中学生、高校生、40～50歳代で低く70%前後となっています。女性はどの年代でも、おおむね80%以上となっており、40歳代は97.1%となっています。



資料：平成26年度健康づくりに関する県民意識調査

心の悩みについて相談できる窓口を知っている人の割合は、全年代を通して50%以下となっています。中でも、60歳代の女性が19.2%と低くなっています。

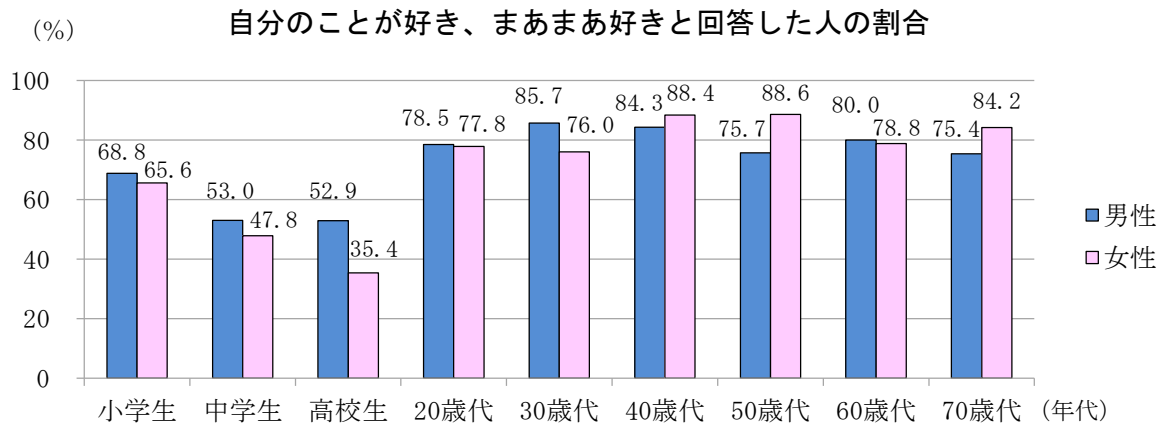


資料：平成26年度計画（第2次）策定のためのアンケート調査

④自分のことが好きな人

自分を好き、かけがえのない存在だと思える感情（自己肯定感*）を持つことで、自分の命を大切にし、ほかの人も大切にしようとする意識につながります。

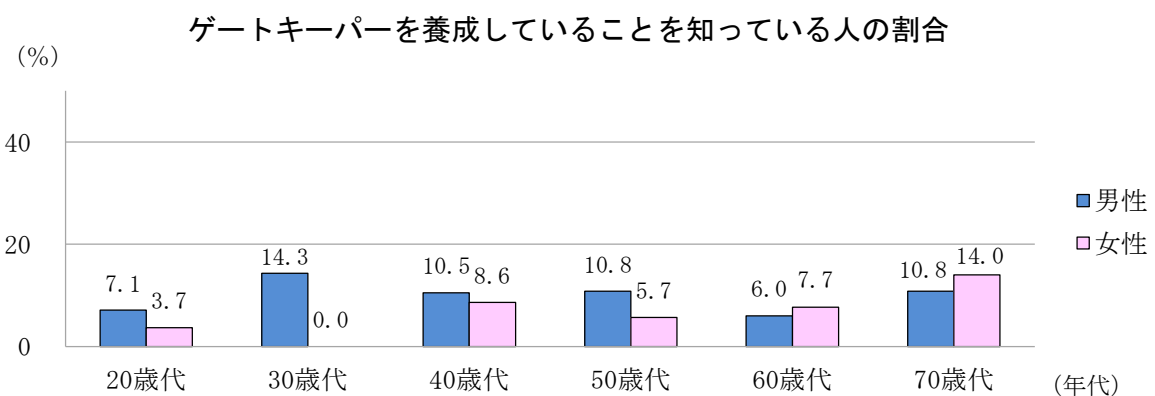
自分のことが「好き、まあまあ好き」と回答した人の割合は、中学生、高校生で 35.4～53.0%となっていますが、20 歳以降になると 75.4～88.6%と高くなります。



⑤ゲートキーパー*を養成していることを知っている人

本市では「身近にいる人が悩んでいる人のサインに気づき、声をかけ、気持ちを聴くなどの役割を担うゲートキーパーを増やす」ことを目的としてゲートキーパーの養成を行っています。

しかし、ゲートキーパーを養成していることを知っている人の割合は、20～70 歳代の全年代を通して 14.3%以下となっています。



*自己肯定感：「自分は大切な存在だ」、「自分はかけがえのない存在だ」と、自分の存在を肯定できる気持ちのことです。自己肯定感を高めるためには乳幼児期に養育者から愛され、自分の存在を認めてもらったという経験が大切です。

*ゲートキーパー：悩んでいる人に気づき、自殺を防ぐ「命の門番」のことです。（⇒P86 参照）

●市民インタビューより

(事業所の健康管理担当者)

働く年代の心の健康について

- ・40歳代の男性は、中間管理職となり責任ある立場になることが多く、心のバランスを崩しやすい。
- ・男性は「家族や職場等には心配させたくないため自分からは相談できない」など、家族や周りの人へ相談しづらい現状がある。
- ・真面目で責任感の強い人が、仕事の失敗等がきっかけでうつ状態になることがある。
- ・周りが早めに気づき、医療機関につなげるなど、早めに対応することで回復に向かう例が多い。

「みんなのこころ」のまとめ！

・20～50歳代の男性は・・・

悩みやストレスがある人の割合は高く、困った時に相談ができる人の割合は低く、心の悩みについて、相談できる窓口を知っている人の割合が、23.8～35.7%と低くなっています。中でも40歳代の男性はストレス解消法を持っている人の割合と困った時に相談ができる人のいる割合も全年代の中で最も低くなっています。

・30～40歳代の女性は・・・

悩みやストレスがある人の割合が76.7～86.3%と高くなっています。30歳代はストレス解消法を持っている人の割合が全年代の中で最も低くなっています。しかし40歳代になると、ストレス解消法を持っている人の割合は30歳代よりも増え、困った時に相談ができる人がいる割合も97.1%となります。

●策定委員から出た意見

お互いを思いやるためには、自分の健康を保つことが大切と思う。どうしたら、自分の心の状態を振り返ることができるのかな。

心配をかけたくない気持ちから家族や職場に相談できない人もいます。地域や周りの人が気づき、声をかけ、話を聴き、相談機関につなげること（ゲートキーパーの役割）ができればよいかもしれないね。

自分の力で対応できない心の悩みやストレスがあれば、誰かに相談することで深刻な状態になることを防げるのではないだろうか。

人との関わり、コミュニケーションが大切。そうすることで、人の気持ちや悩みに気づけるのではないだろうか。

ストレスは誰にでもあるもの。ストレスに気づき、ストレスとうまく付き合ったり、自分に合ったストレス解消法を見つけるとよいのではないかな。

小・中学生から自己肯定感を持てることが大切。自己肯定感があれば人への気配りもできるのではないかな。

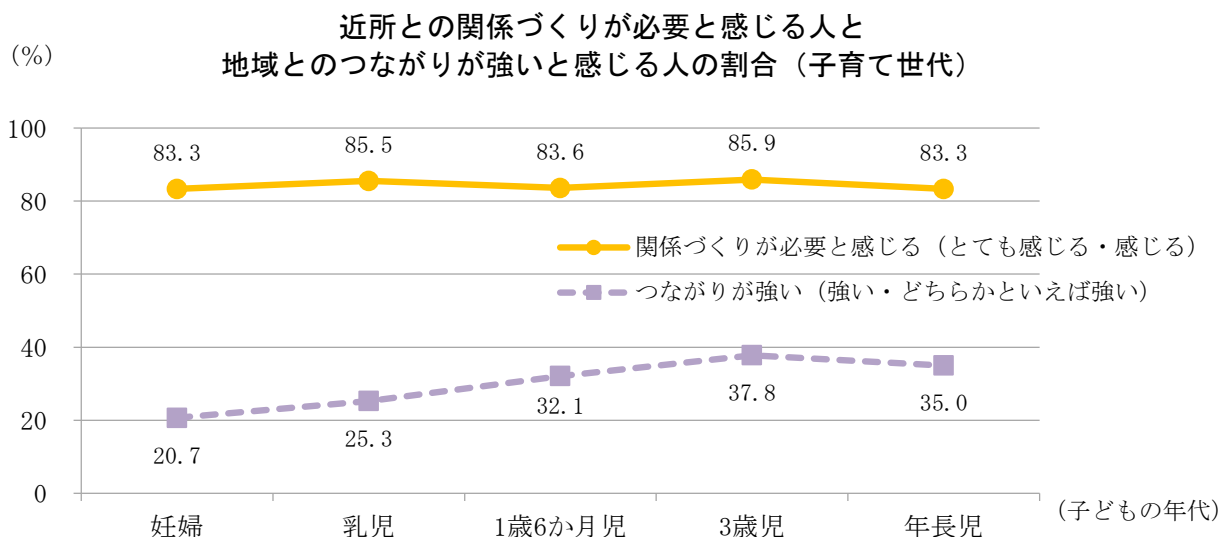
●では、どうしたら良いのでしょうか？

自分の心の健康を保ち、お互いに思いやって悩みを抱えている人に気づけることが大切だね。



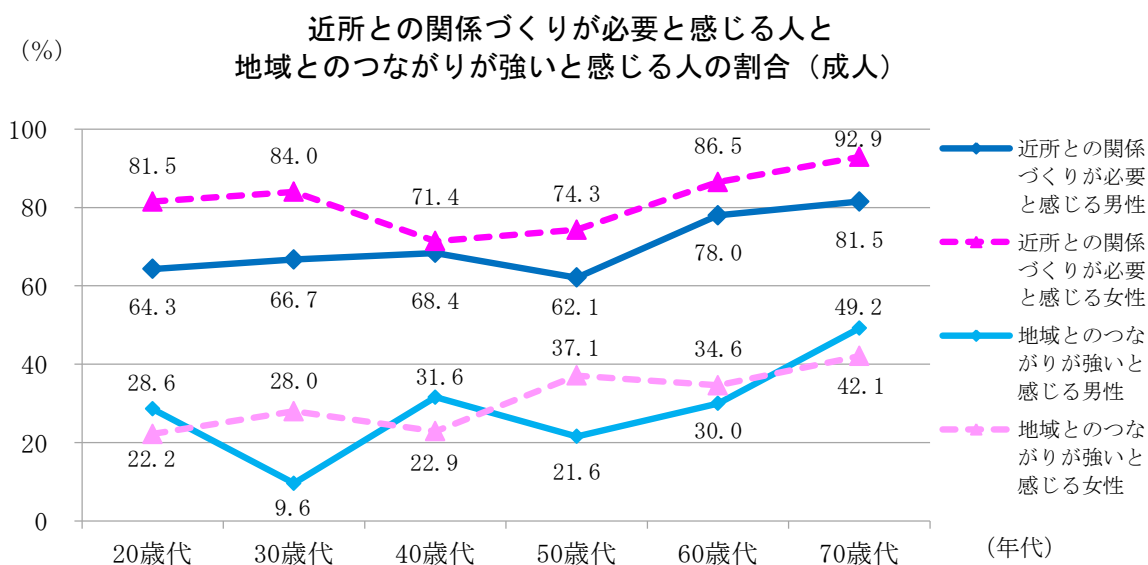
(7) 地域のつながり

子育て世代(妊婦と乳幼児の親)は、「近所との関係づくりが必要」と感じている人が80%以上いる一方で、「地域とのつながりが強い」と感じている人は20~40%程度と低く、つながりについての思いと実際には差があります。



資料：平成26年度計画(第2次)策定のためのアンケート調査

成人も、子育て世代と同様に、「近所との関係づくりが必要」と感じている人が60%以上いる一方で、「地域とのつながりが強い」と感じている人は10~50%程度と低く、つながりについての思いと実際には差があります。



資料：平成26年度計画(第2次)策定のためのアンケート調査

●市民インタビューより

(40～50 歳代の女性)

「自治会や班の役員になれば付き合いが始まるけど、役が終わると付き合いはなくなるよね。」

「子どもが小さい時は近所の子どもたちと遊んだりして、自然と近所の人とつながっていた。」

「見守り隊等、お世話をしている人を身近に見て、将来、時間がとれるようになったら自分達はその役割を担わないといけないと思うよ。」

(一戸建てに住んでいる人)「隣の家の人と農作物のやりとりをしている。」

(アパートに住んでいる人)「様々な人が出入りするのであえて付き合いたくないな。」

(子育てサークルに参加している母親)

年代に関係なく、近所付き合いをしている人が多くいました。また市民アンケートと同様に、今後も近所付き合いを望んでいるとの声が多くありました。

「地域のつながり」のまとめ！

- ・近所との関係づくりが必要と感じる人の割合は、妊婦と乳幼児の親で高くなっています。しかし 40～50 歳代で低くなり、60～70 歳代で高くなります。
- ・全年代を通して、「近所との関係づくりが必要」と感じる人に比べ、実際に「地域とのつながりが強い」と感じる人の割合は半分程度と低く、つながりについての思いと実際には大きな差があります。

●策定委員から出た意見



世代を超えて、まずは地域であいさつをすることから始めてみてはどうだろうか。

地域でお世話している人の姿を見たり、お世話になった経験や感謝の気持ちがあると、自分も将来その役割を次の世代へつないでいきたいという思いが出てくるのかな。

地域であいさつをすることで、地域の連帯感が生まれるのではないかな。

誰ともつながらず、孤立することが心配。地域で気にかけて目を持ってほしい。

●では、どうしたら良いのでしょうか？

地域の中で、いろいろな世代の人が交流してつながりをもつことが大切なのかな。



3 市民アンケート等からみえた各年代の現状

妊婦	(栄養・食育) (こころ)	栄養バランスに配慮している人の割合は44.4%であるが、バランスのとれた食事を実践している人の割合は26.2%と低い。 困った時に相談できる人がいる割合は98.4%である。 妊娠中、仕事を続けることに対して職場から配慮された人の割合は、国・県よりも低い。
(乳児 保護者)	(こころ)	困った時に相談できる人がおり、父親の育児参加もある。 
(1歳6か月児 保護者)	(栄養・食育) (こころ)	ほとんどの子どもが朝食を食べている。食べていない子どもの割合は6.6%である。 子どもに対して育てにくさを感じる親や感情的に怒ってしまう親の割合が、乳児期の親より高い。
(3歳児 保護者)	(栄養・食育) (歯と口)	朝食を食べていない子どもの割合は5.2%である。 むし歯になったことがある子どもの割合が、18.2%で1歳6か月児より高い。
(年長児 保護者)	(こころ)	乳児、1歳6か月児、3歳児に比べて、自分から進んで育児に関わっている父親の割合が低い。また、感情的に怒ってしまう母親や子どもを虐待していると思う親の割合が3歳児より高い。
小学生	(栄養・食育) (歯と口) (身体活動・運動) (こころ)	朝食を食べていない人の割合は、3歳児、年長児より高く、13.4%である。栄養バランスに配慮している人の割合は、中・高校生より高い。 むし歯になったことがある人の割合が、51.2%と3歳児より高い。 スポーツをしている人の割合は、男子が高く、男女差が大きい。 自分のことを好きと答えた人の割合は、約70%で男女差はほとんどない。
中学生	(栄養・食育) (歯と口) (身体活動・運動) (こころ)	朝食を食べていない人の割合は、11.5%で小学生とほぼ同様である。栄養バランスに配慮している人の割合は、小学生より低い。 むし歯になったことがある人の割合が、58.7%と小学生より高い。 歯ぐきが腫れたり歯みがきの時に出血する人の割合は高くなり、男子では10.2%である。 スポーツをしている人の割合は、男女とも小・中・高校生の中で最も高い。男子はスポーツをしている人の割合が高く、男女差が依然として大きい。 自分のことが好きと答えた人の割合は、約50%と小学生より低くなる。
高校生	(栄養・食育) (身体活動・運動) (こころ)	朝食を食べていない人の割合は、15%以上である。また、食事のあいさつや共食（朝食・夕食）ができている人の割合が小・中学生よりも低い。栄養バランスに配慮している女子は、小・中学生より低い。 スポーツをしている人の割合は、中学生より低く、男女差がある。 自分のことが好きと答えた人の割合は、男女とも全体の中で最も低い。特に、女子の14.9%が自分のことが嫌いと答えている。 

二十歳代	男性	(栄養・食育) (身体活動・運動)	毎日朝食を食べている人の割合は、全体の中で最も低い。 栄養バランスに配慮している人の割合が 71.4%であるが、バランスのとれた食事を実践している人の割合は 35.7%と低い。野菜を 1 日に 3 皿以上食べる人の割合は 35.7%である。 運動習慣のある人の割合は、男性全体の中で最も低い。
	女性	(栄養・食育) (歯と口) (身体活動・運動) (日頃の健康管理) (地域のつながり)	毎日朝食を食べている人の割合は、女性全体の中で最も低い（妊婦を除く。）。 栄養バランスに配慮している人の割合や、バランスのとれた食事を実践している人の割合は、女性全体の中で最も低い。野菜を 1 日に 3 皿以上食べている人の割合も女性全体の中で最も低い。 「痩せ（BMI18.5 未満）」の人の割合が 14.8%と、高校生より高い。 歯ぐきが赤く腫れたり歯みがきの時に出血する人の割合は、女性全体の中で最も高い。 運動習慣のある人の割合は、3.7%と全体の中で最も低い。 健診を受診している人の割合が、全体の中で最も低い。 自分と地域の人たちのつながりについて強いと答えた人の割合は、22.2%と女性全体の中で最も低い。
三十歳代	男性	(栄養・食育) (歯と口) (身体活動・運動) (日頃の健康管理) (喫煙) (こころ) (地域のつながり)	毎日朝食を食べている人の割合や、バランスのとれた食事を実践している人の割合、共食（朝食・夕食）をしている人の割合が 20 歳代より高い。 歯ぐきが腫れたり歯みがきの時に出血する人の割合は、20 歳代より高い。 運動習慣のある人の割合は、20 歳代より高い。 健診を受診している人の割合が、20 歳代より高い。 たばこを吸っている人の割合は、42.9%と全体の中で最も高い。 悩みやストレスがある人の割合が、全体の中で最も高い。 自分と地域の人たちのつながりについて強いと答えた人の割合は、9.6%と全体の中で最も低い。
	女性	(栄養・食育) (身体活動・運動) (日頃の健康管理) (こころ)	毎日朝食を食べている人の割合や、栄養バランスに配慮している人の割合、バランスのとれた食事を実践している人の割合は、20 歳代より高い。野菜を 1 日に 3 皿以上食べている人の割合は、72.0%と全体の中で最も高い。 「痩せ（BMI18.5 未満）」の人の割合が 20.0%と、全体の中で最も高い。 運動習慣のある人の割合は 8.0%と低い。 健診を受診している人の割合は、20 歳代と同様に低い。 睡眠が十分にとれている人の割合が女性全体の中で最も低い。



四十歳代	男性	(栄養・食育) 栄養バランスに配慮している人の割合や、バランスのとれた食事を実践している人の割合は、全体の中で最も低い。野菜を1日に3皿以上食べている人の割合や共食(夕食)をしている人の割合は、30歳代より低い。 (歯と口) 「肥満(BMI25以上)」の人の割合が増えて全体の中で最も高く、メタボ予防や改善のために生活習慣に気をつけている人の割合は、全体の中で最も低い。 (身体活動・運動) 歯ぐきが腫れたり歯みがきの時に出血する人の割合が、21.0%と全体の中で最も高い。 (日頃の健康管理) 運動習慣のある人の割合は、30歳代より低い。 (こころ) 健診を受診している人の割合は、20~30歳代より高い。 (その他) 自分なりのストレス解消法を持っている人の割合は、全体の中で最も低い。困った時に相談できる人がいる人の割合は、30歳代より低い。 (その他) 毎日飲酒している人の割合は、全体の中で最も高い。	
	女性	(栄養・食育) 栄養バランスに配慮している人の割合や、バランスのとれた食事を実践している人の割合は30歳代より高い。野菜を1日に3皿以上食べている人の割合は30歳代より低い。 (身体活動・運動) 運動不足を感じている人の割合は、85.7%と全体の中で最も高く、運動習慣のある人の割合は30歳代より低い。 (日頃の健康管理) 「ロコモ該当者」の割合は、22.9%と30歳代の2倍以上になった。 (喫煙) 健診を受診している人の割合は、71.4%と30歳代より高い。 (こころ) たばこを吸っている人の割合は、17.2%で女性全体の中で最も高い。 (こころ) 悩みやストレスがある人の割合は、86.3%と全体の中で最も高いが、困ったときに相談できる人がいる人の割合も、97.1%と全体の中で最も高い。	
五十歳代	男性	(栄養・食育) 野菜を1日に3皿以上食べている人の割合は全体の中で最も低い。食事のあいさつをしている人や共食(夕食)をしている人の割合も、全体の中で最も低い。 (歯と口) 「肥満(BMI25以上)」の人の割合が、24.3%と全体の中で30歳代の次に高い。 (身体活動・運動) 義歯(入れ歯)を持っている人の割合が、24.3%と40歳代の4倍以上になった。 (日頃の健康管理) 運動不足を感じている人の割合が73.0%と男性全体の中で最も高い。 (こころ) 「ロコモ該当者」の割合は、21.1%と40歳代より高い。 (こころ) 健診を受診している人の割合は、81.1%で40歳代と同様に高い。 (こころ) 悩みやストレスがある人の割合は、40歳代より高い。 (こころ) 困った時に相談できる人がいる人の割合は、67.6%と全体の中で最も低い。	
	女性	(栄養・食育) 栄養バランスに配慮している人の割合や、バランスのとれた食事を実践している人の割合は、40歳代と同様に高い。 (身体活動・運動) 地域の郷土料理を食べたり地場産物を活用することを意識している人の割合は、70.5%と、全体の中で最も高い。 (日頃の健康管理) 運動習慣のある人の割合は、25.7%と40歳代の4倍以上になった。 (日頃の健康管理) 健診を受診している人の割合は、77.1%と女性の全体の中で最も高い。	

六十歳代	男性	(栄養・食育) 毎日朝食を食べている人の割合は、90%を超えている。栄養バランスに配慮している人の割合は、50歳代より2倍以上になった。バランスのとれた食事を実践している人の割合は、62.0%と全体の中で最も高い。野菜を1日に3皿以上食べている人の割合は、50歳代の2倍以上になった。 (歯と口) 食事のあいさつを心がけている人の割合は、50歳代と同様に低い。共食(朝食・夕食)をする人の割合は、50歳代より高い。義歯(入れ歯)を持っている人の割合は、40.0%と50歳代より高い。 (身体活動・運動) 運動不足を感じている人の割合は、50歳代より半減した。運動習慣のある人の割合は、50歳代より高い。 (日頃の健康管理) 健診を受診している人の割合は、50歳代より低い。 (こころ) ストレスのある人の割合は、40.7%と全体の中で最も低い。 (地域のつながり) 近所の人との関係づくりが必要と感じている人の割合は、50歳代より高い。	
	女性	(栄養・食育) 毎日朝食を食べている人の割合、共食(朝食・夕食)をしている人の割合は、50歳代より高い。「肥満(BMI25以上)」の人の割合は、25.0%と全体の中で最も高い。「痩せ(BMI18.5未満)」の人の割合は、15.4%と50歳代より高い。 (歯と口) 義歯(入れ歯)を持っている人の割合は、19.2%と50歳代より高い。 (身体活動・運動) 運動習慣のある人の割合は、50歳代より低い。 (日頃の健康管理) 健診を受診している人の割合は、50歳代より低い。 (こころ) 悩みやストレスがある人の割合は、50歳代より低い。 (地域のつながり) 近所の人との関係づくりが必要と感じている人の割合は、86.5%と50歳代より高い。	
七十歳代	男性	(栄養・食育) 毎日朝食を食べている人の割合は、93.8%と男性全体の中で最も高い。共食(朝食・夕食)をしている人の割合は、全体の中で最も高い。食事のあいさつをしている人の割合は、60歳代より低い。「肥満(BMI25以上)」の人の割合は、60歳代より高い。 (歯と口) 義歯(入れ歯)を持っている人の割合は、58.5%と全体の中で最も高い。 (身体活動・運動) 運動習慣のある人の割合は、58.5%と全体の中で最も高い。「ロコモ該当者」の割合は、41.0%と男性全体の中で最も高い。 (日頃の健康管理) 健診を受診している人の割合は、50.8%と60歳代より低い。 (地域のつながり) 近所の人との関係づくりが必要と感じている人の割合は、81.5%と男性全体の中で最も高い。地域の人たちとのつながりについて強いと感じる人の割合は、49.2%と全体の中で最も高い。	
	女性	(栄養・食育) 毎日朝食を食べている人の割合は、96.5%と全体の中で最も高い。共食(朝食・夕食)をしている人の割合は、82.7%と女性全体の中で最も高い。 (歯と口) 義歯(入れ歯)を持っている人の割合は、57.9%と60歳代より3倍となった。 (身体活動・運動) 運動習慣のある人の割合は、47.4%と女性全体の中で最も高い。「ロコモ該当者」の割合は、54.7%と全体の中で最も高い。 (地域のつながり) 近所の人との関係づくりが必要と感じている人の割合は、92.9%と全体の中で最も高い。地域の人たちとのつながりについて強いと感じる人の割合は、42.1%と女性全体の中で最も高い。	